

gigantibus, quorum umeris insideo nanus

——中世ラテン語と歴史家のための諸道具——

千葉敏之

はじめに

「中世ラテン語なるものは存在しない、そのための辞典も文法書も、ゆえに存在しないだろう」¹。

たびたび引用されるこの予言は、皮肉にも、「中世ラテン文献学 Mittellateinische Philologie」に近代的学知への道を拓いたルートヴィヒ・トラウベ(LUDWIG TRAUBE)によるものである²。1888年以降ミュンヘンにおいて彼の講筵に侍した者たち、さらにまたその弟子たちは、その後何世代にも亘り、師のこの予言を覆そうと弛まぬ努力を積み重ねてきた。科学としての自己証明が学問領野としての存立に関わっていた19世紀末に呱呱の声をあげた中世ラテン文献学は、第一次世界大戦後の人文学における鮮烈な危機意識を潜り抜け、また1930年代の「文化憎悪 Kulturhaß」(ERNST ROBERT CURTIUS)³の政治状況とその破局を生き延び、いまこうしてわれわれの手元にまで届けられている。ここで紹介する「諸道具 Instrumenta Studiorum」は、ともするとその利便性やアクセシビリティでのみ評価されがちであるが、それらはすべて先駆者たちが、己が時代の奔湍のなかで産み出し、そして後代へと縷々伝承してきた、まさに「歴史の遺産」であることを、決して忘れてはなるまい。

¹ トラウベのこの文言で書き起こすのは、文献学者が中世ラテン語について語るときの伝統となっている。それはシットツが言うように、「ルートヴィヒ・トラウベの、この挑発的で、不安をかきたてる章句が、われわれ文献学者たちの肉に棘の如く突き刺さっている」からである(Peter STOTZ, In Sichtnähe: Ein 'Handbuch zur lateinischen Sprache des Mittelalters', in: FM t. 1 (1994), S. 183-202, hier S.183;「トラウベの懷疑 die Traube'sche Skepsis」)。いわば「自己否定」を学の出発点とした擅着と真摯に向かい合い、それを克服せんとする弛まぬ営みこそがMittellateinerの使命であり、また歴史そのものであった。カール・ランゴシュの気負いも、此處に根ざしている。Karl LANGOSCH, *Mittellatein als Deutschkunde: eine nationale Aufgabe deutscher Wissenschaft und Schule*. Breslau 1937.

² トラウベ(1861-1907)とともに中世ラテン文献学を築いた人物として、通例 WILHELM MEYER AUS SPEYER(1845-1917, Göttingen)とPAUL K. R. VON WINTERFELD(1872-1905, Berlin)の名があげられる。トラウベの生涯については、論文集第1巻に、トラウベの一番弟子で論文集編者でもあるパウル・レー・マンによる詳細な解説がある(P. LEHMANN, Ludwig Traube. Vorbemerkung, in: L. TRAUBE, Zur Paläographie und Handschriftenkunde, Hrsg. von P. LEHMANN. München 1909, S. XI-XLVII)。トラウベの影響は、彼の講義・著作を通じて、欧米全域に及んでいる(英国の W. M. LINDSAY, 米国の E. A. LOWEなど。[兼岩 1954:H9], 211頁以下)。またミュンヘンはドイツ・中世ラテン文献学のメッカとして、PAUL LEHMANN(1884-1964)、BERNHARD BISCHOFF(1906-91)、JOHANNE AUTENRIETH(1924-96)と俊秀な逸材を輩出している。「ミュンヘン学派」の系譜とAUTENRIETHの功績については、Albert DEROLEZ, Johanne Autenrieth als Paläographin, in: MJ Bd. 32, 2 (1997), S. 203-206とそれに続く業績目録を参照。

³ E. R. CURTIUS, *Deutscher Geist in Gefahr*. Stuttgart/Berlin 1932. ドイツ的教養解体の危機を創造的に乗り越えるための「新たなる人文主義 Neue Humanität」の必要を唱えるクルティウス(1886-1956)によるマニフェスト。戦後スイスにて刊行される主著(*Europäische Literatur und lateinisches Mittelalter*. Bern 1948.)への序文ともいるべき小著で、彼の基本的な時代認識が明かされ、それに根ざした学術的使命が声高に宣言されている。このあまりにも著名なロマニストを理解するには、その出身地アルザスという土地柄と家系(祖父ERNST CURTIUS[1814-96]は高名な古典文献学・考古学教授)、学問的父としてのABY WARBURG(1866-1929)とGUSTAV GRÖBER(1844-1911: Romanistikの定礎者)、そして20世紀前半という時代とを十分考慮しなければならない。クルティウスは、中世を総体として学究するための「中世ラテン文献学」を、既存の学問境界を打ち破り、あるいは乗り越えることで確立し、その方法を駆使することによって、中世ラテン文化世界を共通基盤とする「意味的統一體 Sinneinheit」としての「ヨーロッパ」を剔出することを目指した。Jan M. ZIOLKOWSKI, Ernst Robert Curtius(1886-1956) and Medieval Latin Studies, in: JMLat. vol. 7(1997), pp. 147-167。マールブルクで1924年まで教鞭をとった後ハイデルベルクに移り、1929年ボン大学に招聘され、そこに中世ラテン文献学ならびにロマンス語学の礎を築いた。いわゆる「ボン学派」はその後、中世ラテン歌謡の研究で学界をリードしている。こうしたロマニスト系の中世ラテン文献学者(ときに異端視されがち)として、無論、エーリヒ・アウエルバハ(ERICH AUERBACH, 1892-1957)とその主著 *Mimesis: Dargestellte Wirklichkeit in der abendländischen Literatur*. Bern 1946.の名をあげなければならない。

1. 中世ラテン語とは何か [H1-47]

一般に「中世ラテン語 Mittellatein」という場合、シャルル・マニュからフマニスト登場までの時期に西欧教養世界において主に文章語として通用していたラテン語を指す。こうした時期定義は、キケロとヴェルギリウスを頂点とする「古典ラテン語 Klassisches Latein」と、「人文主義ラテン語 Humanistenlatein」という二つの高みによって挿まれた、否定的・受動的定義に他ならない。その背景には、時代概念としての「中世 Mittelalter」そのものもまた、イタリア人文主義が生み出した否定的な歴史的概念であるという事情がある⁴。

中世ラテン語の言語としての生い立ちは、通常、俗ラテン語(その発展形としての俗語)・後期ラテン語・教会ラテン語にある、と言われる。末期ローマ帝国における文章=教養語(Hochsprache)は「後期ラテン語 Spätlestein, latin tardif」、ローマ市民が話していたラテン語は「俗ラテン語 Vulgärlatein, latin vulgaire」と呼ばれる⁵、前者の後期ラテン文章語を独自の世界観をもって変容させていったのが初期キリスト教であった。既存語彙の意味を読み替え(*fides*=信仰、*gratia*=恩寵)、またギリシア語からの借用(*ecclesia*=教会)を通じて独自の語彙体系を作り上げ、また典礼という儀礼空間の中で、神聖なる言語という特殊な社会的地位を付与されたラテン語は、研究上「(初期)キリスト教ラテン語(Alt-)Christliches Latein」と呼ばれる。そしてそれはその出自・使用空間・扱い手に従い、「聖書ラテン語 Bibellatein (Itala, Vulgata)」(H14-17)、「教父ラテン語 Latein der Kirchenväter」、「典礼ラテン語 Liturgielatein」(H18-21)、「スクラ・ラテン語 Scholastisches Latein」に分類される⁶。

以上の3つのカテゴリーは、20世紀前半に研究分野としての地歩を固め、主に各國語=俗語への発展と中世ラテン語への継承という観点から研究されている(→[D]・[H])。

史上、ラテン語は二度世界を制圧した、と言われる。最初はローマ人の世界帝国の支配言語として、二度目は西欧キリスト教文明の言語として⁷。スウェーデンのラテン文献学者エイナール・レーフステット(EINAR LÖFSTEDT, 1880-1955)によれば、前者、すなわち「古典ラテン語」を一個の独立した文章語として完成させたのがキケロだとするなら、後者、「教会ラテン語」を世界文明たらんとするキリスト教文明の支配言語として確立したのは、テルトゥリアヌスであった⁸。民族移動とローマ帝国秩序崩壊後の社会・文化編成の大転換を契機として、

⁴ 「古代、中世、近代というのは、ヨーロッパ史の三つの時代に対する呼称、学術的には「根拠のない ungereimt(韻を踏んでいない: ALFRED DOVE)」呼称であるが、実際的な意思疎通のためには不可欠のものである。もっとも空虚なのは、中世という概念である。これはイタリア人文主義によって刻印されたものであり、まさにそうした観点からのみ説明可能なものである」(CURTIUS, *Europäische Literatur*, S. 30[註 3]; [SZÖVÉRFFY:B26]S. 13)。

⁵ 「われわれが<俗ラテン語>と呼ぶものは、初期古典ラテン語から発展した、中流階層の話し言葉(speech)である」([GRANDGENT:D17]p. 3)。「俗ラテン語」に関する文献については、[CAENEDEM 1997:F2]p. 372f.を参照。比較的新しく、信頼できる入門的文法書は[VÄÄNÄNEN:D26]であろう。それからクセジュ文庫に[J. HERMAN:D25]の邦訳がある。俗ラテン語については、その祖語として、ロマンス語学の側からの研究もある。Gerhard ROHLFS, *Einführung in das Studium der romanischen Philologie*. Heidelberg 1966, S. 120ff; Erich AUERBACH, *Introduction aux études de philologie romane*. Frankfurt am Main 1949; G. GRÖBER, *Grundriss der romanischen Philologie*. 2 Bde. Straßburg 1886-1902.

⁶ 教会ラテン語については、とくにオランダ・ネイメーヘン(Nijmegen)大学の CHRISTINE MOHRMANN による一連の研究が重要である([MOHRMANN:H13])。「キリスト教ラテン語」の存在を積極的に評価する、MOHRMANN および J. SCHRIJNEN に代表される「ネイメーヘン学派」の基本的見解については、[STRECKER:D2]p. 22f.を参照。また、リーダーや文法書、辞典については、文献目録を参照。

⁷ Einar LÖFSTEDT, *Zur Entstehung der christlichen Latinität*, in: ders., *Syntactica*. 2. Teil. Lund 1933, S. 458.

⁸ エイナール・レーフステットは統語論の専門家で、ウプサラ大学講師を経て、1913年からルンド大学教授。多くの弟子を育て、「ルンド学派」を形成。出版物は主にドイツ語で、[LÖFSTEDT:D28]はフランス語、イタリア語などに翻訳されている。ラテン語の、古典古代から中世への連続性を強調し、後期ラテン語ばかりでなく、教会ラテン語・中世ラテン語の積極的意義と言語体系としての独自性を主張する。

教会ラテン語は言語構造的特徴や語彙体系とともに、その社会的な地位を大きく変える（社会言語学的な転換）。この時期の教会ラテン語を上記の「初期キリスト教ラテン語」と峻別し、中世ラテン語の枢軸的構成要素として「中世教会ラテン語 Kirchenlatein des Mittelalters」と呼ぶことができよう。

デンマークにおける中世ラテン文献学の定礎者で、UAI企画[NOVUM GLOSSARIUM:A2]の編集主幹にも抜擢されたフランツ・ブラット(FRANZ BLATT, 1903-79)は中世ラテン語の成立要因として、俗=国語(Nationalsprache)による影響、社会変容による影響、スコラ学の影響の三点をあげている⁹。中世ラテン語の母は、上記「後期ラテン語」の文章語に存する¹⁰。ローマ帝国の崩壊後、その後継諸邦のなかで文章語としてのラテン語と日常口語(sermo quotidianus)としての俗語(vernacular)=国語(Nationalsprache)という二重言語状況(Bilingualismus)¹¹は日増しに昂進した。文章ラテン語は特定サークル内で保存・再生産されるなかで、しだいに貶質化し、発展と進化のさなかにある後者によって日々影響を受けた。それはまた、文章ラテン語を使う者たちも、日々の生活においては絶えず俗語を話していたからである。そして俗語の文章語化の趨勢の只中で、存在意義の消失と権威失墜の危機に晒されていた文章ラテン語は、やがて中世ヨーロッパ文化の核となるキリスト教のなかに不時着し、その特異な社会的地位のなかで、教養人(litteratus)のジャーゴン・文筆語としてだけでなく、神の儀礼を司る「典礼語 Liturgiesprache(神聖語 Sakralsprache)」、中世諸制度・機構の隅々に下達される「行政語 Administrationssprache」(神聖王権下の儀礼空間では神聖語でもある)、ラテン世界各地を行き交う「通商語 Kommerzsprache」、中世人の日々の生活を規律する「法制語 Rechtssprache」として、つまりは旺盛な適応能力と増殖能力を兼ね備えた新しい言語体系として、新生した。かくして中世ラテン語は広義の「文化言語 Kultursprache」として、そして「生ける言語 langue vivant」として、中世社会に定位し、その血流となる。

中世ラテン語を形成する、いま一つの看過しえぬ「構成要素」、より正確にはヴェクトルとして、キクロ=ヴェルギリウス的古典ラテン文章語の存在がある。これは直接的な、時系列の発展系譜に位置付けられるべきものではなく、中世ラテン語におけるいわゆる「古典主義 Klassizismus」の問題と深く関わっている。年代記・書簡において顕著だが、とりわけカロリング・ルネサンス、十二世紀ルネサンスといった古典復興・礼賛の風潮のなかで、ラテン語作家たちは伝承されている古典期のラテン語テクスト(スエトニウスなど)を模倣し、文章の巧拙をそれを基準に裁断した¹²。全般的傾向としての俗語化の趨勢のなかで、古典ラテンへの復帰運動が、時期に応じて高低のウェイヴを描きながら、中世ラテン語の歴史を貫いている。

中世ラテン語はまた、使用された時代・社会集団に応じたカテゴリーにも分類される。すなわちツールのグレ

⁹ Franz BLATT, Sprachwandel im Latein des Mittelalters, in: *Historisches Vierteljahrsschrift. Zeitschrift für Geschichtswissenschaft und für Lateinische Philologie des Mittelalters.* Jg. XXVIII (1934), S. 22-52. 要点は以下の通り:(1)直接的な語借用(Entlehnungen: 借訳語 Lehnübersetzungenも含む)は、各地域毎に現地の俗語から頻繁におこなわれた。古典ラテン後期にもすでにゲルマン諸語・ケルト語からの借用語はあったが、ギリシア語からのそれと比べ散発的で、言語体系への構造的衝撃は微弱であった(S. 23)。ところが中世ラテン語になると、俗語からの借用は、証書・立法・文学とあらゆる分野(とくにテクニカル・ターム)に及び、言語全体を貫通し、また、古典ラテン語には知られていない、ギリシア語からの新たな借用語も数多く見られる(S. 25)。借用語・借訳語はともに、行政用語・法律用語・租税用語・特産物表現・貨幣・度量衡表現・地名といったカテゴリーに頻出し、文章構成自体に影響を及ぼすことさえあった(S. 33)。(2)古典末期から中世にかけての社会のドラスティックな変容は、語が意味する内容をも自ずと変えていった。無論最大の変化は、社会のキリスト教化のうちに表現されている(pontifex, consistorium, templumなど)。また行政用語も、統治行政組織の変化に応じてその意味内容を変えていった(consul, senatus, praetor urbanusなど)。(3)スコラ的な論理的類推から、数々の抽象的造語が形成され(-tas, -ivus; in-, con-)、また概念創出の過程と結びついて新語が形作られた(スコラ哲学の体系性)。

¹⁰ [STRECKER:D2] p. 20.

¹¹ 詳論を許されるならば、事態はかように単純ではない。社会言語学の概念ツールを援用しつつ、近年欧米での研究動向を整理したものとして、[佐藤 1995:H47]を参照。

¹² [兼岩:H46]158 頁以下。ランゴシュは、中世ラテン作家のなかには古典的ラテン語と中世的=俗語的ラテン語を作品のジャンル・狙いに応じて使い分けていた者もいたとし、その例としてインハルトの名をあげている。[LANGOSCH:D3]S. 41。中世における、主だった古典ラテン作家のテクスト伝承状況については、TEXTS AND TRANSMISSION. A Survey of the Latin Classics. Ed. by L. D. REYNOLDS. Oxford 1983 を参照。

ゴリウス、フレデガールの告白のために「墮落せるラテン語」のレッテルを貼られた(a)「メロヴィング・ラテン Merowingerlatein」(H23-25)、大陸からもたらされた後期ラテン語を、生得ではなく、習得すべき「技術語」としていわば冷凍保存し、その後大陸への伝道過程でそれを再び大陸に伝えた(b)「アイリッシュ・ラテン Irländisches Latein」、そのインパクトとノーサンブリア系文化の指導性のもとで開花したカロリング・ルネサンスに胚胎せる(c)「カロリング・ラテン Karolingerlatein」¹³、そしてスコラ哲学の体系的・類推的思考のなかから増殖した(d)「スコラ・ラテン」である。

中世ラテン語を斯様に整理・理解したうえで、以下、関連する参考文献を、その成立の歴史のなかに位置付けながら、文法書、リーダー、辞典の順に紹介していきたい。

2. 文法書 Grammatik [D1-39]

中世ラテン文法は、古典ラテン文法からの逸脱の公約数である、ということが言われる¹⁴。その背景には、從来本格的・体系的な中世ラテン文法書というものが存在しなかつたという事情がある。これまで 1928 年に初版が刊行された、文法書というよりはその名にある通り「文法入門」たる[STRECKER:D2]が、各国語に訳されながら、長きにわたり愛用されてきた。その後も同様の「入門書」として、ドイツ語圏では[LANGOSCH:D3]が 1963 年の初版以来版を重ね、北欧圏ではスウェーデン・ストックホルム大学の文献学者で、国際的活躍もめざましいダーグ・ヌールベリ(DAG NORBERG, 1909-96)による入門書[DAG NORBERG:D5]が世に問われた。ただしこれはテクスト・アンソロジーの精読を通じて文法を体得させるスタイルで、むしろリーダーの部類に属しよう。これらはいずれも体系性・網羅性の要請を充たす「文法書」と呼べるものではなく、「トラウベの懷疑」は依然として、文献学者たちの勇気を挫き続けていた。

しかし 1996 年、ついにスイス・チューリヒの文献学者ペーター・シュトツ(PETER STOTZ)によって、「向後世代を超えて、中世ラテン文献学者にとって不可欠の書となるべき大作(*magnum opus*)」(BENGT LÖFSTEDT)¹⁵と評される全 5 卷の文法書の刊行がはじまった[STOTZ:D1]。文法は全 10 章に分かたれ、1 卷から 4 卷までに配置されている。第 1 卷(2002 年刊行予定)には I:「導入 Einleitung」、II:「辞典編纂の実践 Lexikographische Praxis」、III:「語彙と領野 Wörter und Sachen」、IV:「借用語 Lehnwortgut」の 4 章が、第 2 卷(2000 年)には V:「語義の変化 Bedeutungswandel」、VI:「造語論 Wortbildung」が、第 3 卷(1996 年)には VII:「語音論 Lautlehre」が、第 4 卷(1998 年)には VIII:「語形論 Formenlehre」、IX:「統語論 Syntax」、X:「文体論 Stilistik」が、そして最後の第 5 卷(2003 年刊行予定)には、確実にこれまで最も詳細なビブリオと、史料一覧、索引が収められている¹⁶。シュトツが「冒險心 Wagemut」をもって、永年中世ラテン文献学者たちが躊躇ってきた文法書執筆に踏み切ることができたのは、19 世紀末以来の学問的蓄積や辞典編纂へ向けた各様の尽力もさることながら、本人の言に在るが如く、中世ラテン文法書の在り方そのものの問い合わせ直しに負うところが大きい。「ラテン語とは多かれ少なかれ、諸規則からなる一つの閉じたシステムであって、それに基づけばすべてのテクストの正誤、ひいては巧拙までもが判断されうる」という伝統的文法観に異議を申し立て、言語の実体性(Körperhaftigkeit)への信仰を凌駕し、局地的体系性を備えた、用例集成型の文法書こそが、中世という時代、そしてその文筆文化に相応しいスタイルであるという認識に、シュトツは到達したのである。

¹³ カロリング朝下での純粹主義的言語改革(カロリング朝小文字体 Karolingische Minuskel の採用など)がラテン語識字文化に及ぼした衝撃とその社会的帰結(階層間コミュニケーション・ツールとしてのラテン語の終焉)については、〔佐藤 1995:H47〕を参照。

¹⁴ [国原 1975:D10]ii 頁。

¹⁵ In: MJ Bd. 32, 2(1997), S. 141-144, hier 141.

¹⁶ 特に興味深いのは第 2 章で、ここでは 20 世紀初頭以来の中世ラテン語辞典編纂の歴史・目的、編纂に関する技術的な問題が扱われることになっている。本文法書については、P. STOTZ, In Sichtnähe[註 1], S. 183-202.が最も詳しい。また、チューリヒ大学の著者自身の HP にも最新情報がある(<http://www.unizh.ch/mls/hlsma.html>)。

さて、初学者が最初に手にすべきものとしては、現時点では[GOULLET-PARISSE:D8]が新しく、また学びやすい「課」構成の体裁となっている。同じフランス語では、『L'ATELIER DU MÉDIÉVISTE』のシリーズから[BOURGAIN-HUBERT:D11]が刊行予定である。中世史家の「使い勝手」を第一に考えたシリーズであることから¹⁷、いたって実用的な内容となることが期待される。無論、わが国唯一の[国原 1975:D10]は、まず最初に参照されるべきものである。その他イタリア語では[CREMASCHI:D9]が、スペイン語では[VILLIMER LLAMAZARES:D6]がある。なお後期ラテン語については[LÖFSTEDT:D28]が、俗ラテン語については[VÄNÄÄNEN:D26]、キリスト教ラテン語については[BLAISE 1955:D39]が基本となろう。

3. リーダー Lesebuch [E1-5]

中世ラテン語を習得するには、こうした文法理論とともに、やはり実際のテクストを数多く読み消化し、経験値を高めることが肝要である。その際すぐに専門領域の原テクストに向かうのではなく、正確な対訳と丁寧な解説の施されたリーダーを上手に利用することが望ましい。現時点で最良のリーダーは[SIDWELL:E1]で、テクスト解題と文法的説明が類書に比べ格段に丁寧である（対訳は教授法上、敢えて割愛）。また[THEUERKAUF:E4]はよりディダクティッシュな構成で、各タイプの史料から何をいかに読み取るべきかという歴史家の史料眼にまで踏み込んでいる。[ARCHIVES DE L'OCCIDENT:E5]は中世史の著名テクストのアンソロジーで、収録点数は多いものの、簡潔なテクスト紹介文とフランス語対訳のみの内容となっている。訳語には疑問の残る点が少なくない。

これらを一通りやり終えたなら、次のステップとして、対訳付き史料集（ドイツでは FREIHERR VON STEIN-GEDÄCHTNIS-AUSGABE¹⁸等）の活用を薦めたい。しばしば巻末に収録されている訳語付き索引は、専門語彙辞典としても活用できる。

4. 辞典 Wörterbuch／事典 Lexika [A1-39][B1-26][C1-14]

中世ラテン語辞典の原点は、やはりデュ・カンジュ（1610-88）の[DU CANGE:A1]（1678年）にある。17世紀ルイ14世治世のパリで生まれた¹⁹、この全三巻、フォリオ版（2^o）の辞典は、その名の通り、「辞典」というよりはむしろ、中世ラテン文筆文化の直接の系譜上にある、いわゆる「語彙集 Glossarium」のカテゴリーに入り、現代的表現に置き換えるなら、17世紀フランスの教養人ラテン語で書かれた「百科事典 encyclopédie」であった。彼の没後、最新のファーヴル版にいたるまで5度の大改訂がおこなわれていること、そして19世紀にはデュ・カンジュを翻案・縮約した辞典類が各地で上梓されていること、そして20世紀初頭以来中世ラテン辞典編纂学（Mittelalteinische Lexikographie）において「敬愛すべき創始者 *venerabilis inceptor*」として尊崇されている事実は、斯分野における同辞典の揺るぎない地位を雄弁に物語る。

¹⁷ JACQUES BERLIOZとOLIVIER GUYOTJEANNINが編集責任を負うシリーズで、きわめて実用性が高く、中身の濃いマニュアルである。第1巻は史料の取り扱い法、第2巻は中世古文書学、第3巻は中世ドイツ語、第4巻は中世英語、第5巻は中世碑文学、第6巻は西欧中世社会経済史史料論、第7巻は中世古銭学、以上が既刊である。刊行予定のものとしては、中世考古学、中世紋章学、中世ラテン語、中世図像分析法、中世古書体学、プロソポグラフィー、中世印章学、ビザンツ史史料論などがある。最新刊行事情については BREPOLS PUBLISHER の HP を参照されたい（<http://www.brepols.com/publishers>）。

¹⁸ 既刊各巻の内容については、[drv-BGM:F3] S. 259-262 に一覧がある。

¹⁹ 横山紘一「古文書学——近代の学知か」（同著『西洋学事始』日本評論社 1982年；中公文庫版 1987年、文庫版では121-142頁所収）は、デカルト的知性とは異なる、17世紀フランスのもうひとつの知の営みの系譜を、古文書学の祖ジャン・マビヨン、イエズス会ボランディストの活動を中心に叙述している。こうした17世紀ヨーロッパの「知識人共和国 Gelehrtenrepublik」については、[CAENEDEM 1997:F2] pp. 217-276 にも詳しい記述がある。また[DU CANGE:A1]出版300年を記念して1978年パリで開催された国際コロキウムのコロック[1978-PARIS-COL.:H8]も参照のこと。

19世紀後半、言語学・辞典編纂術の著しい発展は、その学問水準に見合った新たな「中世ラテン語辞典」への要請を各国研究者のあいだに高めてゆく(John Murray, K. E. Georges, Lorenz Diefenbachらの企画を参照)。そうしたなか1913年2月R. J. Whitwellは、デュ・カンジュに取って代わる新しい中世ラテン語辞典の編纂をBRITISH ACADEMY(BA)に提言した。すでに刊行が始まっていたNED(OEDの前身)の編集方針²⁰を手本とするこの辞典編纂企画は、同年4月にロンドンで開催された第5回国際歴史学会議(INTERNATIONAL CONGRESS OF HISTORICAL STUDIES)に出席する諸外国の研究者たち²¹を前に開陳され、その結果BAが企画を整備した上でUAI(UNION ACADEMIQUE INTERNATIONALE、本部:ブリュッセル)に提出することが決議された。BAが設置した専門委員会の活動はしかし、第一次大戦勃発のために中断を余儀なくされた²²。

第一次大戦後、この企画を蘇生させたのは、1920年5月ブリュッセルにおいて開かれた、再建間もないUAIの会議席上での、総裁アンリ・ピレンヌの提言であった²³。UAIによるこの「新デュ・カンジュ」プロジェクトは、参加各国の編集委員会(COMITÉ NATIONAL)が担当地域の800年から1200年(当初は1000年頃)までの中世ラテン語語彙を所定の書式でカード化し、「中世ラテン語辞典編纂(デュ・カンジュ)中央委員会COMITÉ CENTRAL DU DICTIONNAIRE DU LATIN MÉDIÉVAL(ブリュッセル)に送付したものもとに「新デュ・カンジュ辞典」を刊行する»NOVUM GLOSSARIUM«計画と、各国が独自のタイムスパンに基づいて(多くはその国の中世全体をカヴァー)編纂する»ナショナル・レキシコン NATIONALLEXIKA«計画の二つの柱からなる。まもなく一斉にはじまった項目カード・史料インデックス作成作業の進捗状況は年次総会において報告され、1924年に創刊された機関誌[ALMA:G1]誌上に掲載されている。編纂計画遂行途上で生じた技術的な諸問題もまた同誌上で公表され、その後の作業に活かされている。

英国ではBAが1924年に二つの委員会を組織した(代表はJ. H. Baxter)。一つは、国際的なスキームに従い、ノルマン・コンクエスト以前の時期について、英國・アイルランドのラテン語語彙を収集(pre-Conquest-commission、紀元1086年頃まで)、いま一つはノルマン・コンクエスト以後の時期についてのラテン語語彙の収集を担当した(post-Conquest-commission)。その後同様の委員会がアメリカ合衆国、スコットランド、アイルランドにも組織され、BA所属の委員会と協働するようになる(前二者は1950年までに機能停止、後者は1968年アイルランド独自のプロジェクトとして分離独立²⁴)。

収集対象となる史料一覧は1932年[ALMA:G1]に掲載され(INDEX OF BRITISH AND IRISH WRITERS A. D. 400-1520)、またその年までに両委員会が収集した語彙情報は、1934年ひとまず[WORS-LIST:A12]として刊

²⁰ 1857年PHILOLOGICAL SOCIETY(London)に出版計画が提案され、1884年2月A New English Dictionary(NED)として刊行が始まり、1928年に完結。編集主幹は、当時PHILOLOGICAL SOCIETYの総裁であったJAMES MURRAY。The History of the Oxford English Dictionary, in: *The Oxford English Dictionary*. Second Edition(OED2). Vol. I. Oxford 1989, pp. xxxv-lxi.

²¹ 各国の代表者には、HENRI PIRENNE(ベルギー), FELIX LIEBERMANN(ドイツ), ALFONS DOPSCH(オーストリア=ハンガリー), PAUL GAVRILOVITCH VINOGRADOFF(英国)などがいた。Ch.-V. LANGLOIS, Historique sommaire de l'entreprise. De 1920 à janvier 1924, in: ALMA t. I(1924), pp. 5-15.

²² この間の事情については、H. C. JOHNSON, Preface, in: [LEX.BRIT.:A13]fasc. I(1975), pp. vii-ix; R. E. LATHAM, Suggestions for a British-Latin Dictionary, in: ALMA t. XXVII(1957), pp. 189-229、その他に[WORD-LIST:A12][Revised WORD-LIST:A12]のPrefaceを参照。

²³ 以来、この「新デュ・カンジュ構想」は、デュ・カンジュを»venerabilis inceptor«とし、歴史家の国際的協働の父ピレンヌを発案・組織者とする企画として、糺余曲折を経ながらも今日まで継承されている。ピレンヌの精力的な国際的学界活動については、佐々木克巳『歴史家アンリ・ピレンヌの生涯』創文社 1981年、とくに316頁以下を参照。Joseph BIDEZ, Henri Pirenne à l'Union académique internationale, in: *Henri Pirenne. Hommages et Souvenirs*. Bruxelles 1938, t. I, pp. 86-87.

²⁴ これはNational Committee for Greek and Latin Studies of the Royal Irish Academy(Dublin)による企画で、1968年以降、英国のUAI企画との密接な連携のもとに作業が進められている。将来的にはMedieval Latin Dictionary from Insular Celtic Sources(*DMLCS)[LEX.HIB.:A14]として刊行される予定。この長大な計画の詳細・経過については、ALMA t. XL(1977), p. 155f.およびHP(<http://journals.eecs.qub.ac.uk/DMLCS/DMLCS.html>)を参照。

行される。[WORD-LIST:A12]はその後 5 回のリプリントを経た後、1965 年 PUBLIC RECORD OFFICE の R. E. LATHAM により大幅な増補改訂を施された([Revised WORD-LIST:A12])。1963 年に改組された編纂委員会は、その LATHAM を full-time editor に迎え(1967 年)、「NOVUM GLOSSARIUM」編集局と密なる連携を取りながら、ついに 1975 年英國版ナショナル・レキシコン[LEX.BRIT:A13]の第 1 分冊刊行に漕ぎ着ける。1997 年に第 5 分冊(H, K, L)が、2001 年 7 月には第 6 分冊(M)が刊行予定である。本辞典の編集方針・項目構成は、いまや英國辞典編纂の伝統たる OED・[OLD:C7]のそれを踏襲している。

UAI 企画によるナショナル・レキシコンのなかで最も徹底した編集方針をもち、ゆえに最も信頼できるものは、1937 年に「遅れて」²⁵ 参加したドイツ・オーストリア学士院が共同で編纂する[LEX.GERM.:A9]であろう。ドイツ・オーストリアは MGH (MONUMENTA GERMANIAE HISTORICA)、TLL (THESAURUS LINGuae LATINAE:C1) という近代歴史学・文献学における記念碑的事業の推進国であり、その方法論・経験・人材は[LEX.GERM.:A9]編纂にも活かされている。すなわち、1939 年に専用ポストが置かれたミュンヘン(1950 年以降ベルリンにも設置)に招聘され、引退まで辞典編纂の指揮をとり続けたのは、[THESAURUS:C1]編集部出身の OTTO PRINZ であった。こうしたデータ収集・編纂・辞典刊行事業は、バイエルン学士院 (BAYERISCHE AKADEMIE DER WISSENSCHAFTEN) 内に設置された「中世ラテン語辞典編纂委員会」によって管理統括されている(委員長は 1954 年までは JOHANNES STROUX、それ以後は PAUL LEHMANN)²⁶。

1959 年に刊行が始まり、2001 年時点で漸く「D」に突入した[LEX.GERM.:A9]の主な対象は、ドイツ語圏(ドイツ・オーストリア・スイス=ドイツ語圏・低地地方)における既公刊文書・証書であるが、この地理的枠組みは中世ラテン語のもつ國際的性格ゆえにあまり厳密には囚われず、必要に応じた「越境」が許容されている(MGH 収録の中世ラテン語テクストはその出自に関わらず全て採用)。また従来のラテン語辞典が等閑にしてきた専門的学術語彙(医学・植物学・動物学・手工業技術・鍊金術・数学・算術・音楽・狩獵など)にも十分な注意が払われている。収録対象期間は、[THESAURUS:C1]の収録下限である 5 世紀末からアルベルトゥス・マグヌスの没年(1280)前後までである。

その他北欧圏(スウェーデン[LEX.SUEV.:A29]²⁷、デンマーク[LEX.DAN.:A30]²⁸、フィンランド[LEX.FIN.:A25])、東欧圏(ポーランド[LEX.POL.:A18]、チェコ[LEX.BOHM.:A28]、ハンガリー[LEX.HUN.:A21]、旧ユーゴスラヴィア[LEX.IUG.:A26])、イベリア半島(カタロニア[GLOS.CAT.:A24]、スペイン[LEX.HISP.:A24])²⁹、低地地方(オランダ[LEX.NED.:A22]、ベルギー[LEX.BELG.:A23])、イタリア

²⁵ UAIへの復帰が 1937 年、編集作業の開始は 1939 年であった。Johannes SCHNEIDER, Grundlagen und Methoden der mittelalterlichen Lexikographie in Deutschland, in: *Studia Źródłoznawcze* IV (1959), S. 149-152, hier S. 149。佐々木によれば、ドイツの企画参加の「遅れ」は、第一次大戦におけるドイツ知識人の裏切りへの、アンリ・ピレンヌ(UAI 総裁)による報復であった、という。佐々木、前掲書、319 頁。

²⁶ P. LEHMANN, Vorwort, in: [LEX.GERM.:A9] S. V-IX.

²⁷ スウェーデンにおける中世ラテン文献学の歴史と現状については、Alf ÖNNERFORS, Die mittelalterliche Philologie in Schweden, in: *Mj* Bd. 4 (1967), S. 243-259 を参照。スウェーデンにおける斯学の三傑として名前があげられるのは、lund 大学の EINAR LÖFSTEDT(上述)、ウppsala 大学の JOSEF SVENNUNG、ストックホルム大学の DAG NORBERG である。ÖNNERFORS が嘆くスウェーデンにおけるラテン語知識の後退・軽視の現実のなかで、この三者を原点とする学派は中世ラテンに関する高度な研究を生み出し続けている。

²⁸ デンマークにおける中世ラテン文献学の歴史と現状については、Aage KABELL, Die mittelalterliche Philologie in Dänemark, in: *Mj* Bd. 6 (1969), S. 199-213 を参照。デンマークにおける中世ラテン文献学は、16 世紀の CHRISTIERN PEDERSEN 以降、現在の新デュ・カンジュ企画に至るまで、つねに SAXO GRAMMATICUS とその著 *Gesta Danorum* をめぐって展開してきた。戦後文献学を支えたのは、オーフス大学古典文献学教授 F. BLATT(既述)であったが、彼は学生時代に E. LÖFSTEDT の講義を聴き、ゼミにも出席していた、という。また彼はミュンヘンで[THESAURUS:C1]の編纂作業に携わっており、[NOVUM GLOSSARIUM:A2]編集主幹への抜擢も、その経験を買われたからであった。

²⁹ イベリア半島における中世ラテン文献学の歴史と現状については、Hans-Georg KOLL, Die mittelalterliche Philologie in den Ländern der iberischen Halbinsel, in: *Mj* Bd. 1 (1964), S. 162-195 を参照。戦後スペインにおける文献学を率いているのは、サラマンカ大学ラテン文献学教授の MANUEL C. DÍAZ Y DÍAZ である。

[LEX.IT:A15]において、それぞれナショナル・レキシコンの編纂が進んでいる。また大幅に遅れているフランスについても、現在パリ第一大学教授ミシェル・パリスのもとで、刊行へ向けた準備が進行中である([LEX.GAL.:A34])。これら全ての進捗状況は、[ALMA:G1]・[MJ:G2]に毎年掲載されている。

この「世紀のプロジェクト」が完成した暁には、われわれ中世研究者は、古典ラテン語については[THESAURUS:C1]を、800年から1200年までの中世ラテン語については[NOVUM GLOSSARIUM:A2]を、800年以前から1200年以後人文主義にいたるラテン語については、各国のナショナル・レキシコンを紐解くことで、西欧中世におけるラテン文筆文化の総体を把握するための、不磨の「道具」を手にすることになる。

しかし2001年現在、こうした事態が現実のものとなるまでにはなお半世紀、あるいはそれ以上の歳月を必要とするだろう。それは1954年当時の事情と、実はほとんど変わりがない：「いま子供期を終えたばかりの者は、生涯、その完成を目にするとはないであろう」。これはアムステルダム大学の歴史学部教授 JAN FREDERIK NIERMEYER が新デュ・カンジュ・プロジェクトについて評した有名な言葉である。彼がわずか20年余りのあいだに、ほとんど独力で完成した[NIERMEYER:A5]は、完結といふ事のみならず、法制史料中心というその収録内容においてもまた、歴史家にとっていま最も重要な中世ラテン語辞典(1150年まで)であるといえる。さらに教会史の分野でも、まさに同じ頃、同じような意図から出発した ALBERT BLAISE の一連の仕事[BLAISE 1954:A6] [BLAISE 1975:A7]がある。両者ともに、語彙数や参照史料点数、言語学的語釈の徹底度の点で甚だ不十分であるとはいえ、現時点では、[DU CANGE:C1]の改訂モノではない、数少ない、完結した、独自の中世ラテン語辞典として、必ず座右に置かれるべきものである。

ラテン語で書かれた歴史史料を読み解く場合、上記の言語学的な編纂スタイルをもつ辞典よりもむしろ、[DU CANGE:A1]の如き百科事典的な語釈事典の方がときに有用であることは、経験的によく知られているところであろう。文献リスト[B]の項目に列挙した事典類(Lexika)は、テクスト中に登場するラテン語語彙から検索可能なものであり、その専門領域は、地名・人名、キリスト教・教会制度・神学、法制史・カノン法、諺・韻文に及ぶ。個々の事典の特徴については、各々のコメントを参照してほしいが、そのなかで一頭地を抜いているのが[LexMA:B1]であり、CD-ROM 版が昨年に公刊されたことから、使い勝手も格段に向上了っている(項目中単語の検索が可能)。項目化されているラテン語の数も類書をはるかに上回る。かならず座右に据えねばならぬ参考図書の一つであろう。

*

*

*

本来ならば、これらの「果実」を実らせた中世ラテン文献学の歩みについて詳しく触れるべきところであるが、紙幅の制約上、別の機会に譲らねばならない(とりえずは[MJ:G2]誌上に掲載された概観的諸論稿を参照)。中世ラテン語で書かれたテクストの解読を通じて往時の社会のありようを理解するという点で、文献学と歴史学のあいだには垣根はない。両者は「中世学 Mediävistik」として、これからも手に手を携えていかねばならないだろう³⁰。そのような交流の機会が皆無に等しいわが国の現状のなかで、この小稿がそのための一助となるのなら、これに優る悦びはない。中世学という枠組みは、従来の西洋史学という「シオンの番兵」(ABY WARBURG)の眼を盗み、あらたな問題領域へと創造的に、果敢に挑みうる可能性を秘めているのではないだろうか。

³⁰ ドイツではすでにこうした傾向が顕著である。著書・雑誌のタイトルにも MITTELALTERLICHE GESCHICHTE から MEDIÄVISTIK ないし MITTELALTERFORSCHUNG への移行が、一つの潮流として認められる。Hans-Werner GOETZ, *Moderne Mediävistik. Stand und Perspektive der Mittelalterforschung*. Darmstadt 1999; MEDIÄVISTIK. Internationale Zeitschrift für interdisziplinäre Mittelalterforschung. Frankfurt am Main et al., seit 1988。北米における呼称 MEDIEVAL STUDIES もまた、史学と文学の垣根を越えた超領域的研究を示唆している。

Bibliographie: Mittellatein

〔〕内は本稿著者のコメントで、〔〕は略記号。^{*}印のついたものは、編著者による「公称」。それ以外は、本稿著者の責任において、できるだけ内容類推が容易な表記を心掛けた。本来この種の作業は共同作業であるべきで、個人では様々な点で限界がある。数年後の改訂増補を考えているため、要訂正箇所や記載すべき情報があれば、ぜひクリオ編集部まで御一報されたい。

[A] 中世ラテン語辞典 Mittellateinisches Wörterbuch/Glossar

重要なものは網羅したつもりである。ただし特殊語彙辞典については、[MED.LAT.] [BB]を参照のこと。

- A1: Carolus du Fresne dominus DU CANE, GLOSSARIUM AD SCRIPTORES MEDIAE ET INFIMAE LATINITATIS. 3 vol., Paris 1678(初版); 2^e éd., par les Mauristes, 6 vol., Paris 1733-36(マウリスト版); 3^e éd., avec supplément en 4 vol., par Dom P. CARPENTIER, 10 vol., Paris 1766(カルパンティエ版); 4^e éd., par G. A. L. HENSCHEL, 7 vol., Paris 1840-50(アンシェル版); 5^e éd., par L. FAVRE, 10 vol., Niort 1883-87(ファーヴル版)。
 [(DU CANE): ファーヴル版以降の「補遺」(主に[ALMA:G1]に掲載)については、[STRECKER:D2] p. 40を、その他デュ・カンジュに関する経歴・書誌情報は[1978-PARIS-COL:H8]を参照。]
- A2: Franz BLATT/Yve LEFÈVRE, NOVUM GLOSSARIUM MEDIAE LATINITATIS AB ANNO DCCC USQUE AD ANNUM MCC. Hafniae (København [Copenhagen]) 1957—; INDEX SCRIPTORUM NOVUS MEDIAE LATINITATIS... 2. ed. Hafniae 1973; INDEX... SUPPLEMENTUM, Hafniae 1989.
 [(NOVUM GLOSSARIUM): 本文参照。UAI 新デュ・カンジュ企画の本体。1957年に「J」から刊行開始。発行ペースはきわめて遅く、1995年時点ではようやく「P」に入る(-pepticus)。1983年「O」刊行時点での編集委員は、B. BISCHOFF, R. E. LATHAM, D. NORBERG, M. PLEZIA, C. SAMRAN, P. SMIRAGLIA, P. TOMBEUR, O. WEIJERS, Y. LEFÈVRE。]
- A3: Lorenz DIEFFENBACH, GLOSSARIUM LATINO-GERMANICUM MEDIAE ET INFIMAE AETATIS e codicibus manuscriptis et libris impressis. Supplementum lexici mediae et infimae conditi a Carolo Dufresne Domino Du Cange. Frankfurt am Main 1857; ID., NOVUM GLOSSARIUM. Frankfurt am Main 1867.
 [(DIEFFENBACH): [DU CANE:A1]への補遺。後者は前著への著者自身による補遺。150にわたる中世・初期近代の語彙集(Glossaria)を駆使し、各時代のドイツ俗語文化によるラテン語理解のありようを解明する手がかりを提供する辞典。中世文筆文化の一ジャンルとしての「語彙集」研究にも必携の書。]
- A4: W.-H. MAIGNE D'ARNIS, LEXICON MANUALE AD SCRIPTORES MEDIAE ET INFIMAE LATINITATIS ex glossariis Caroli Dufresne D. Ducangii, D. P. Carpentarii, Adelungii et aliorum in compendium accuratissime redactum, ou RECUEIL DE MOTS DE LA BASSE LATINITÉ dressé pour servir à l'intelligence des auteurs, soit sacrés, soit profanes, du Moyen Âge. Paris 1858; Reprint 1890, 1977.
 [(MAIGNE D'ARNIS): [DU CANE:A1]ならびにカルパンティエ補遺、アーデルンク補遺(J. Ch. ADELUNG, 6 vol., Halle 1772-84)の縮約版。本来のラテン語語釈に仏語対訳が施された、1巻本のハンディな羅仏辞典の体裁となっている。なお、出典指示はカットされている。]
- A5: Jan Frederik NIERMEYER, MEDIAE LATINITATIS LEXICON MINUS. Leiden 1954-76; C. van de KIEFT, ABBREVIATIONES ET INDEX FONTIUM. Leiden 1976.
 [(NIERMAYER): 本文参照。編者J. F. NIERMEYER(1907-65)は、アムステルダム大学中世史・歴史補助学正教授(VAN DE KIEFTもまた同大学教授)。編者は、[DU CANE:A1]がもはやさまざまな理由から現代歴史学の要請に応えるものではなくなっていること、また「新デュ・カンジュ」計画の完成はまだ遠い先であるという状況のもとで、とくに歴史家の実用に耐えうる(証書史料等の説解に適した)ハンディな辞典(Lexicon Minus)を短期間(当初の計画では約10年)で編纂することを目指した。1965年のNIERMAYER死去の時点で第11分冊(-vaccarius)までが既刊、最後の第12分冊・引用史料インデックスの作成がVAN DE KIEFTによって継承されることになる。項目構成は、ラテン語項目語に仏語・英語による対訳・語釈が施され、重要語義には引用と出典とが記されている。収録対象期間は原則AD550-1150年で、純粹古典ラテン語は対象外、後期ラテン語については[SOUTER:C11]に依拠。項目作成には[DU CANE:A1]ファーヴル版だけでなく、当時アクセス可能な、歴史史料の全モダン・エディションが顧慮されている。中世史家にとって、現在最も重要な辞典。]
- A6: Albert BLAISE, DICTIONNAIRE LATIN-FRANÇAIS DES AUTEURS CHRÉTIENS. Strasbourg 1954; 2^e éd., par Henri CHIRAT, Turnhout 1967.
 [(BLAISE 1954): 初期中世(テルトゥリアヌスからメロヴィング朝終焉まで、約AD200-750)を対象とした、神学・哲学

語彙中心のキリスト教ラテン語辞典。全 1 卷完結。対訳はフランス語で、収録語彙の多さと適切な用例が特長(語源説明はない)。技術的表現は少なく、抽象的・概念的な語義が主体。中世盛期以降のキリスト教テクストにも十分使える。最重要辞典の一つ。】

- A7: Albert BLAISE, DICTIONNAIRE LATIN-FRANÇAIS DES AUTEURS DU MOYEN-AGE =LEXICON LATINITATIS MEDII AEVI praesertim ad res ecclesiasticas investigandas pertinens (*Corpus Christianorum, Continuatio Mediaevalis*). Turnhout 1975.
【(BLAISE 1975): ブレーズ自身の史料精査によるものと、[DU CANGE:A1]を主とする先行辞典から集めた情報によって構成される。教会史・聖人伝・典礼・哲学・神学・修道院関係文書・カノン法など、法制史語彙を主体とする [DU CANGE:A1] や[NIERMEYER:A5]からは拾いにくい語彙を中心に収録。対象時期は 7-13 世紀。ゆえに実質上[BLAISE 1954:A6]の、内容では技術的語彙中心の「補遺」、対象時期では「総筆」と位置付けられる。】
- A8: Albert BLAISE, LE VOCABULAIRE LATIN DES PRINCIPAUX THÈMES LITURGIQUES. Ouvrage revu par Dom Antoine DUMAS, O.S.B. Turnhout 1966.
【(BLAISE 1966): 典礼用語を、祈祷法(ミサ等の神を崇める作法)・信仰法(神、イエス・キリストなどの信仰対象)・生活法(信者としての生活)の三分野に分類し、そこに立てられた各項目について、ふんだんな用例を用いながら詳細な語釈・語史説明を加えている(聖務日課のラテン語呼称、信仰告白の言い回しなど)。典礼ラテン語の入門書と辞典を兼ねた一書。】
- A9: Otto PRINZ/Theresia PAYR/Peter DINTER, MITTELLATEINISCHES WÖRTERBUCH BIS ZUM AUSGEHENDE 13. JAHRHUNDERT. Begründet von Paul LEHMANN und Johannes STROUX. In Gemeinschaft mit den Akademien der Wissenschaften zu Berlin (später DDR), Göttingen, Heidelberg, Leipzig, Mainz, Wien und der Schweizerischen Akademie der Geistes- und Sozialwissenschaften, hrsg. von der Bayerischen Akademie der Wissenschaften. 1959—. Bd. 1: A-B (fasc. 1-10), München 1967; Bd. 2: C (fasc. 11-23), München 1999; Bd. 3., Lfg. 1(-defatigo), München 2000; Abkürzungs- und Quellenverzeichnisse, 2. Aufl., München 1996.
【(LEX.GERM.): 本文参照。UAI 企画ナショナル・レキシコンのドイツ語版。刊行は、現在ようやく「D」に突入。最も詳細で、最も信頼できるナショナル・レキシコン。】
- A10: Edwin HABEL/Friedrich GRÖBEL, MITTELLATEINISCHES GLOSSAR. Paderborn 1931; 2. Aufl., Paderborn 1959; Reprint, Paderborn 1989.
【(MLat.GLOS.): 大学における中世史史料購読ゼミでの使用を念頭に置いた上で作成された、きわめてコンパクトな語彙集。[DU CANGE:A1] や[DIEFENBACH:A3]だけでなく、アルキポエタ等の韻文、ヘルモルト等の年代記、さらにはカール大帝の帝国御料地令等の法史料をもって語義を独自に補う。各項目には独語訳が無造作に列挙されるだけで慣用句・出典指示はほとんどないので、他の信頼できる辞典での再確認が不可欠。】
- A11: Eduard BRINCKMEIER, GLOSSARIUM DIPLOMATICUM. Zur Erläuterung schwieriger, einer diplomatischen, historischen, sachlichen, oder Worterklärung bedürftiger lateinischer, hoch- und besonders niederdeutscher Wörter und Formeln, welche sich in öffentlichen und Privatkunden, Capitularien, Gesetzen, Verordnungen, Zuchtbriefen, Willküren, Weisthümern, Traditions- und Flurbüchern, Heberollen, Chroniken, Rechnungen, Inschriften, Siegeln u.s.w. des gesammelten deutschen Mittelalters. 2 Bde.: Bd. 1, Hamburg 1856, Bd. 2, Gotha 1855.
【(BRINCKMEIER): JOHANN PETER LUDWIG EDUARD BRINCKMEIER, 1811-97. 編者は作家であり、辞典編纂家であるが、その辞典編纂術は独自の史料精査に基づくのではなく、多くは既存の類書からデータを無批判に寄せ集めたもので、実用性第一の、好事家受けするものばかりであった。ただし本辞典編纂には異例の長期間が当てられており、その豊富な用例ゆえに、今日でもなおしばしば参考される。各項目は、独語による語義・語釈、豊富な用例からなる。】
- A12: MEDIEVAL LATIN WORD-LIST FROM BRITISH AND IRISH SOURCES. Ed. by J. H. BAXTER and C. JOHNSON, with assistance of P. ABRAHAMS. London 1934; REVISED MEDIEVAL LATIN WORD-LIST FROM BRITISH AND IRISH SOURCES. Ed. by R. E. LATHAM, under the direction of a committee appointed by the British Academy. London 1965.
【(WORD-LIST) [Revised WORD-LIST]: UAI 企画ナショナル・レキシコン英国版編纂のために、「中世ラテン語辞典編纂委員会」が収集した語彙集。詳細は、本文参照。】
- A13: DICTIONARY OF MEDIEVAL LATIN FROM BRITISH SOURCES. Prepared by R. E. LATHAM, under the direction of a committee appointed by the British Academy. London 1975—.
【(LEX.BRIT.): UAI 企画ナショナル・レキシコン英国版の本体。6 世紀から 16 世紀までの英国におけるラテン語語彙を網羅。2001 年時点で「M」まで刊行。OED/OLD の編集スタイル・項目構成を踏襲する。本文参照。】
- A14: DICTIONARY OF MEDIEVAL LATIN FROM CELTIC SOURCES. Ed. by A. J. R. HARVEY.
【(LEX.HIB.) [*DMLCS]: UAI 企画ナショナル・レキシコンのアイルランド版。未刊。編集母体は、アイルランド王立学士院(RIA)。刊行状況は、RIA の HP (<http://www.ria.ie>) を参照。】
- A15: Francesco ARNALDI et al., LATINITATIS ITALICAE MEDII AEVI inde ab a. CDLXXVI usque ad a. MXXII lexicon imperfectum. 3 vol. Torino 1970; Addenda I-III. Torino 1978, Addenda IV-V, Torino 1984.

【[LEX.IT.]:FR. ARNALDI, 1897-1980. UAI企画ナショナル・レキシコンのイタリア版。1936年以降不定期に雑誌[ALMA:G1]t. X-XXXIV(1936-64)に掲載され、1970年には独立の辞典として出版。1967年以降補遺も不定期に同誌に掲載され、1995年時点までAddenda 11(-*pono*)まで到達(補遺も随時独立刊行されている)。476年から1022年(オットー朝支配の終焉)までを対象とする。*imperfectum*とあるように語彙数も語釈量も少なく、暫定的な性格が強い。医学関連語彙に強い。】

- A16: Pietro SELLA, GLOSSARIO LATINO-EMILIANO (Studi e testi 74). Città del Vaticano 1937.
【[GLOS.EMIL.]:北イタリア・エミーリア地方に関するローカル・レキシコン。】
- A17: Pietro SELLA, GLOSSARIO LATINO-ITALIANO. STATO DELLA CHIESA-VENETO-ABRUZZI (Studi e testi 109). Città del Vaticano 1944.
【[GLOSSTAT.]:教皇領・ヴェネト地方・アブルッツォ地方に関するローカル・レキシコン。】
- A18: Marian PLEZIA/C. WEYSSENHOFF-BROŻKOWA, LEXICON MEDIAE ET INFIMAE LATINITATIS POLONORUM =SŁOWNIK ŁACINY ŚREDNIOWIECZNEJ W POLSCE. Polska Akademia Nauk. Kraków/Warszawa/Wrocław 1953—.
【[LEX.POL.]:UAI企画ナショナル・レキシコンのポーランド版。編者はポーランドにおける中世ラテン文献学の泰斗で、国際的にも活躍、MPH(MONUMENTA POLONIAE HISTORICA) Series Novaにおけるポーランド中世史史料刊本編纂事業でも中心的人物。編集・刊行母体は、ポーランド学士院(POLSKA AKADEMIA NAUK)。1953年に刊行が始まり、1993年時点までvol. VII, fasc. 3(-*persuado*)まで到達。1988年にはIndex librorumの第2版が出版されている。収録対象は、紀元1000年頃から16世紀末まで。】
- A19: Janusz SONDEL, SŁOWNIK ŁACIŃSKO-POLSKI DLA PRAWNIKÓW I HISTORIKÓW. Kraków 1997.
【[SONEDL]:歴史家・法制史家のためのラテン語=ポーランド語辞典。古典ラテンだけでなく、中世ラテン語も数多く収録されている。】
- A20: Antal BARTAL, GLOSSARIUM MEDIAE ET INFIMAE LATINITATIS REGNI HUNGARIAE. Leipzig 1901; Reprint, Hildesheim 1970.
【[BARTAL]:UAI企画とは無関係の、ハンガリー版ナショナル・レキシコン。古いが、[LEX.HUN.:A21]完結までは、収録語彙数・既完結の点で参照に値する。全1巻723頁で、各項目にはラテン語による語釈・ハンガリー語訳と、最低1つの原文引用がある。】
- A21: Janos HARMATTA/Iván BORONKAI, LEXICON LATINITATIS MEDII AEVI HUNGARIAE = A MAGYARORSZÁGI KÖZÉPKORI LATINSÁG SZÓTÁRA. Budapest 1987—.
【[LEX.HUN.]:UAI企画ナショナル・レキシコンのハンガリー版。1987年に分冊刊行がはじまり(収録対象は1000-1526年)、1993年時点まで第4巻(H)まで出版されている。計画では全6巻で、各巻は5ないし6分冊となる。編集・発行母体は、ハンガリー学士院(MAGYAR TUDOMÁNYOS AKADÉMIA)付属のINSTITUTIO STUDIORUM ANTIQUITATIS PROMOVENDORUM。本辞典の増補が、[ALMA]t. LIII(1995), pp. 41-85に掲載されている。】
- A22: Johanne W. FUCHS/Olga WEIJERS, LEXICON LATINITATIS NEDERLANDICAE MEDII AEVI=WOORDENBOEK VAN HET MIDDELEEWS LATIJN VAN DE NOORDELIJKE NEDERLANDEN. Amsterdam/Leiden 1970—.
【[LEX.NED.]:UAI企画ナショナル・レキシコンのオランダ版。編集・刊行母体は、オランダ王立学士院付属「デュ・カンジュ委員会」。収録対象は800-1500年であるが、主たる史料は12-15世紀に集中している。2000年時点ではfasc. 54(-*roto*)まで刊行済み。各項目にはオランダ語訳とラテン語による語釈、そして用例がある。】
- A23: THESAURUS LINGuae SCRIPTORUM OPERUMQUE LATINO-BELGICORUM MEDII AEVI, I: Le vocabulaire des origines à l'an mil. 5vol. Publié sous la direction de P. TOMBEUR. Bruxelles 1986.
【[*TLSOLB]:辞典ではなく、著者・作品・聖人名・Incipit(書き出し)などのさまざまな語彙インデックス集。ルーヴァン・カトリック大学主催 CETEDOCプロジェクトの一環。編集母体は、ベルギー王立協会付属中世ラテン語辞典編纂委員会(ACADEMIE ROYALE DE BELGIQUE, COMITÉ NATIONAL DU DICTIONNAIRE DU LATIN MÉDIÉVAL)。ベルギーは1956年に上記委員会総裁に就任したレオポール・ジェニコ(LEOPOLD GENICOT)により遅く歴史データのコンピュータ化が導入され、從来のカード方式からの大転換を果たしたため、辞典刊行が遅れている。1973年以降刊行されている、ベルギー中世史料目録 INDEX SCRIPTORUM OPERUMQUE LATINO-BELGICORUM MEDII AEVI [*ISOLB]との姉妹企画。また「新ミニュ(New Migne)・プロジェクト」(since 1953, published by the Benedictines of the St. Peter's Abbey, Steenbrugge, in Belgium)であるCORPUS CHRISTIANORUMとも密接な連携関係にある(cf. [ALMA]t. XL(1977), pp. 143-150)。いずれも、将来刊行されるであろう、ベルギー版ナショナル・レキシコン([LEX.BELG.])の準備作業と位置付けられる。詳しくは、レオポール・ジェニコ/森本芳樹監修『歴史学の伝統と革新』(九州大学出版会1984年)所収の各論稿・付録を参照。】
- A24: M. BASSOLS DE CLIMENT/J. BASTARDAS PARERA et al., GLOSSARIUM MEDIAE LATINITATIS CATALONIAE AB ANNO DCCC USQUE AD ANNUM MC. Barcelona 1960—.
【[GLOS.CAT.]:UAI企画ナショナル・レキシコンのカタロニア版。1939年以前は、イベリア半島からUAIに代表を派遣し、辞典編纂企画に公式に参画していたのは、カタロニア・ネーションの編纂委員会(IEC:バルセロナ)だけであった。1939年以降は、スペインでは非公認だが、UAI会員の地位は保っている。収録対象は800-1100まで。各項

目には出典、語訳、語源、ロマンス語への発展などが記載されている。1960 年から刊行が始まり、1985 年時点では fasc. 9 (-dux) まで刊行済み。スペイン全般を対象とした辞典編纂企画は、1927 年サラゴサを中心に、Msgr. P. GALINDO の指揮下に始まったが、UAI のメンバーではなかった。現在では本部はマドリードに移転、データ収集と分析がおこなわれているが、まだ刊行にはいたっていない([LEX.HISP.])。[THESAURUS:C1]編纂にも携わったスペイン最大の文献学者 MANUEL C. DÍAZ Y DÍAZ (Universidad Salamanca) は、スペインにおける中世ラテン語辞典編纂が抱える問題点を指摘している(*El latín medieval español*, in: *Actas del Primer Congreso Español de Estudios Clásicos*. Madrid 1956, pp. 559-579.)。】

- A25: Reino HAKAMIES, GLOSSARIUM LATINITATIS MEDII AEVI FINLANDICAE. Helsinki 1958.
【([LEX.FIN.]): フィンランド学士院(ACADEMIA SCIENTIARUM FENNICA)の援助のもと、1530 年までの 28 のテクストに基づいて編纂される。先行辞典として、M. HAMMARSTRÖM, GLOSSARIUM TILL FINLANDS OCH SVERIGES LATINSKA MEDELTIDSURKUNDER JÄMTE SPRÅKLIG INLEDNING. Helsinki 1925.がある。】
- A26: Marko KOSTRENČIĆ et al., LEXICON LATINITATIS MEDII AEVI IUGOSLAVIAE. 2 vol. Consilium Academiarum Scientiarum et Artium SFR Iugoslaviae. Zagreb 1968-78.
【([LEX.IUG.]): UAI 企画ナショナル・レキシコンの旧ユーゴスラヴィア版。対象は、15 世紀末まで。イストリアについては、[SEMI:A27]を参照。】
- A27: Francesco SEMI, GLOSSARIO DEL LATINO MEDIOEVALE ISTRIANO. Venezia 1990.
【([SEMI]): UAI 企画ナショナル・レキシコンの旧ユーゴスラヴィア版のイストリア編。】
- A28: Bohumil RYBA et al., LATINITATIS MEDII AEVI LEXICON BOHEMORUM= SLOVNÍK STŘEDOVĚKÉ LATINY V ČESKÝCH ZEMÍCH. Academia scientiarum Bohemo-slovaca. Praha 1977—.
【([LEX.BOHM.]): UAI 企画ナショナル・レキシコンのチェコ版。紀元 1000 年から 16 世紀初頭まで。1992 年時点です 2 卷が刊行され、「H」まで到達。】
- A29: Ulla WESTERBERGH/E. ODELMAN, GLOSSARIUM MEDIAE LATINITATIS SUEVICAE= GLOSSARIUM TILL MEDELTIDSLATINITET I SVERIGE. Stockholm 1968—.
【([LEX.SUEV.]): UAI 企画ナショナル・レキシコンのスウェーデン版。編集母体は、ストックホルムの王立学士院(KUNGL. VITTERHETS HISTORIE OCH ANTIKVITETS AKADEMIEN STOCKHOLM)。項目語の訳語は、スウェーデン語とドイツ語。対象は 13 世紀から 1527 年まで。1995 年時点で、第 2 卷 (-rytenus) まで刊行。同企画に先行する辞典として、[HAMMARSTRÖM:A25]がある。】
- A30: Franz BLATT/Bente FRIIS JOHANSEN/Peter TERKELSEN et al., LEXICON MEDIAE LATINITATIS DANICAE = ORDBOG OVER DANSK MIDDELALDERLATIN. Århus 1987—.
【([LEX.DAN.]): UAI 企画ナショナル・レキシコンのデンマーク版。11 世紀から 1536 年までの、デンマーク出自のすべての公刊テクスト中の非古典ラテン語、すなわち [GEORGES:C3] に収録されていない語彙ないしは語義を網羅する。各項目は、異綴、語義、そして少なくとも 3 つの用例からなっている。残念ながら本計画の国際性に反して、訳語はデンマーク語のみとなっている。1992 年時点で fasc. 4 (-increpito) まで刊行済み。】
- A31: Michael BERNHARD, LEXICON MUSICUM LATINUM MEDII AEVI= Wörterbuch der lateinischen Musikterminologie des Mittelalters bis zum Ausgang des 15. Jahrhunderts. München 1992—.
【([*LmL]): バイエルン学士院音楽史委員会(MUSIKHISTORISCHE KOMMISSION)が編纂する、音楽史関連ラテン語用語辞典。対象は 500-1500 年。1960 年以来の編纂作業において、500 点以上の音楽関係テクストからピック・アップされたおよそ 300 万件の語彙をデータベースとして、1992 年から分冊刊行がはじまった。各項目は、独・英訳語と、一語義につき 2~3 件以上の豊富で、文脈理解に十分な長さの引用からなる。詳細・最新情報については HP (<http://www.badw.de/musik>) を参照。】
- A32: Albert SLEUMER, KIRCHENLATEINISCHES WÖRTERBUCH. Ausführliches Wörterverzeichnis zum Römischen Missale, Breviarium, Rituale, Graduale, Pontificale, Caeremoniale, Martyrologium, sowie zur Vulgata und zum Codex juris canonici... Zweite, sehr vermehrte Auflage des "Liturgischen Lexikons" unter umfassendster Mitarbeit von Benefiziat Joseph SCHMID, hrsg. von Albert SLEUMER. Limburg a. d. Lahn 1926.
【([SLEUMER]): 初版は 1916 年。本書の性格はその副題からも知られるように、中世の靈的生活のなかで用いられた典礼関係の書物ならびにカノン法典を紐解く際に参照されるべき専門用語辞典。項目語およびそれを用いた慣用句にドイツ語対訳が付される。現在でもこの第 2 版の復刻版が入手可能。】
- A33: GLOSSAIRE DU LATIN PHILOSOPHIQUE MÉDIÉVAL. Crée en 1946 par Raymond BAYER, depuis 1972 par Pierre MICHAUD-QUANTIN.
【([GLOS.PHIL.]): 現在作業中の中世哲学ラテン語辞典。1946 年に BAYER によって発足、1970 年以降は MICHAUD-QUANTIN が引き継ぐ、CNRS(CENTRE NATIONAL DE LA RECHERCHE SCIENTIFIQUE)の支援を受けたパリ第一大学のプロジェクト。詳細については、[ALMA] t. XLIV (1982), p. 142ff. および関連 HP (<http://panoramix.univ-paris1.fr/UFR09/LAMOP/lamop.html>) を参照。】
- A34: LEXIQUE LATIN MÉDIÉVAL-FRANÇAIS. A l'initiative et sous la direction de Michel PARISSE.
【([LEX.GAL.]): UAI 企画ナショナル・レキシコンのフランス版。未刊。現在パリ第一大学教授 M. PARISSE の指揮の】

もと、刊行準備が進められている。CNRS とパリ第一大学の合同研究所 LAMOP (LABORATOIRE DE MÉDIÉVISTIQUE OCCIDENTALE DE PARIS) の企画。】

- A35: Rolf LIEBERWIRTH, LATEINISCHE FACHAUSDRÜCKE IM RECHT (UTB1385). Heidelberg 1986.
- A36: Gerhard KÖBLER, LATEINISCH-ALTHOCHDEUTSCHES WÖRTERBUCH. Göttingen et al. 1971; ders., LATEINISCH-ALTNIEDERDEUTSCHES WÖRTERBUCH. Göttingen et al. 1972; ders., LATEINISCH- GERMANISTISCHES LEXIKON. 2. Aufl. Göttingen et al. 1983.
[[KÖBLER]: 中世ラテン=古高・古低ドイツ語の対照表。]
- A37: Florence EDLER, GLOSSARY OF MEDIEVAL TERMS OF BUSINESS. Italian Series 1200-1600. Cambridge 1934; Reprint, 1970.
[[EDLER]: ハーヴァード大学ベイカー・ライブラリ (BAKER LIBRARY) が所蔵するメディチ家由来の通商記録コレクションを利用する学徒のために、F. EDLER 博士によって編纂されたイタリア商業ラテン語辞典。各項目にはまず英訳語があり、これに詳細で丁寧な引用が続く。]
- A38: L. F. STELTEN, DICTIONARY OF ECCLESIASTICAL LATIN. Peabody (Mass.) 1995.
[[STELTEN]: 初学者向けの、教会ラテン語辞典。]
- A39: Olga WEIJERS, DICTIONNAIRES ET RÉPERTOIRES AU MOYEN ÂGE. Une étude du vocabulaire. Turnhout 1991.
[[CIVICIMA-t. 4]: O. WEIJERS が編集主幹を務める、中世知識人の語彙に関する研究シリーズ「CIVICIMA. ÉTUDE SUR LE VOCABULAIRE INTELLECTUEL DU MOYEN ÂGE」の第 4 卷。本シリーズは、*CIVICIMA=COMITÉ INTERNATIONAL DES INSTITUTIONS ET DE LA COMMUNICATION INTELLECTUELLES AU MOYEN AGE (中世における知的機関・知的コミュニケーションに関する国際委員会) の後援のもと、中世の学校教育・出版物のなかで用いられている言語・語彙について、アラブ世界やルネサンスをも視野に入れながら研究することを狙いとする。既刊の諸巻は、主に、隔年で開催される同委員会主宰のコロキウムの議事録(編者は WEIJERS)となっている。詳細は BREPOLS の HP (<http://www.brepols.com>) を参照。]

[B] 事典・ハンドブック Lexika/Handbücher

近代以降の中世ラテン語辞典は、デュ・カンジュなどとは異なり、原則として言語学的な情報記載を主務とする。したがって語義の正確な理解、あるいはそのテクニカル・タームが表わす意味内容を理解するには、中世史・キリスト教など各分野の専門的な事典類の参照が欠かせない。ここでは中世ラテン語語彙からアクセス可能なもののなかで、主なものだけをリストアップしてある。この他の事典類については、[CAENEDEM 1997] pp. 371-449、[dtv-BGM] の該当頁等を参照のこと。

- B1: LEXIKON DES MITTELALTERS. 9 Bde. München/Zürich 1977-97; Studienausgabe. Stuttgart/Weimar 1999; CD-ROM-Ausgabe (Win95/98/NT). Stuttgart 2000.
[[*LexMA]: 現時点で、学術的に最も信頼でき、また収録語数の豊富さでも他の追随を許さぬ中世研究研究者必須の事典。中世ラテン語自体が項目として数多く立てられているため、中世ラテン語辞典としての利用価値も高い。また文献目録も充実している。学生版、CD-ROM 版もある。事項索引がないため文中単語検索ができないという難点があつたが、CD-ROM 版の登場で解決されるであろう。]
- B2: HILFSWÖRTERBUCH FÜR HISTORIKER. Hrsg. von Eugen HABERKERN/Joseph Friedrich WALLACH. Berlin 1935; 2. Aufl., 1964; 3. Aufl., 1971; 7. Aufl., 1987.
[[*HfH]: GEORG VON BELOW の弟子である両著者によって編まれた本事典は、1935 年当時において既存のハンドブック類をもとに項目が作られており、したがってオリジナルではない。民族大移動期を上限とし、中世を中心とした項目選定で、近現代については必要に応じた「逸脱」という程度。また内容的には、固有名詞は一切含まれず、法的内容を有する「術語 Kunstausdrücke」が主体。項目はドイツ語、ラテン語が中心だが、英語・仏語他も少なくない。出典は不明とはいえ、数多の事典類から横断収集しているために、各テクニカル・タームに立てられた語義は多く、また異形同義語 (Synonym)、同音・同形異義語 (Homonym)、異綴などがとても充実していて、検索ヒット率がきわめて高い。1935 年の初版は、1964 年に共著者の一人 JFW によって大幅に増補・改訂され、第 2 版として公刊された。1971 年には、UTB シリーズに上・下二巻本として収録された(第 3 版)。]
- B3: CLAVIS MEDIEVALIS. Kleines Wörterbuch der Mittelalterforschung. Hrsg. von Otto MEYER. Wiesbaden 1962; Reprint, 1966.
[[CLAVIS]: 項目執筆者に RENATE KLAUSER (Heidelberg), OTTO MEYER (Würzburg), JÜRGEN PETERSOHN (Würzburg), ERICH STAHL SCHMIDT (Schweinfurt), GERD ZIMMERMANN (Würzburg)を迎える。古書体学、文書館・図書館学、古文書学、印章学、紋章学、暦学など、いわゆる「歴史補助学(歴史基礎学)」に関する専門用語を厳選し、個々に的確で、ときにかなり詳細な説明が加えられた、きわめてハンディな事典。学術用語が主体であるため、それを割愛した[HfH:B2]新版(1964 年)と合わせて使えば相補的。項末には懇切丁寧な文献指示もあり、項目選択の点からも、他の辞書からは得難い情報を手にすることができる。そうした専門語のなかにはラテン語原語も多数含まれており、証書集などに付された高度に専門的な解説を理解するにも大いに役に立つ。[LexMA:B1]と合わせて利用したい。]

- B4: ORBIS LATINUS: Lexikon lateinischer geographischer Namen des Mittelalters und der Neuzeit. Großausgabe, 3 Bde. Bearbeitet von J. G. T. GRAESSE/Friedrich BENEDICT/Helmut PLECHL, unter Mitarbeit von Sophie-Charlotte PLECHL. Braunschweig 1972 (Bd. 1. A-D, Bd. 2. E-M, Bd. 3. N-Z); ORBIS LATINUS: Lexikon lateinischer geographischer Namen. Handausgabe. 4. rev. und erw. Aufl., hrsg. und bearbeitet von Helmut PLECHL, unter Mitarbeit von Günter SPITZBART. Braunschweig 1971.
- 【[Orbis Latinus-GA] (Orbis Latinus-HA): JOHANN GEORG THEODOR GRAESSE, 1814-85。原編者は司書で、文学史、文化史、陶器史、姓名研究、紋章学など多岐にわたり活動。1861年にGRAESSEが単独で刊行した *Orbis Latinus oder Verzeichnis der lateinischen Benennungen der bekanntesten Städte...* Dresden 1861が基本で、これが1909年・1922年にF. BENEDICTにより増補改訂され、1971年に最新第4版 Handausgabeとして刊行された(収録語数、約1万5千語。独羅もあり。)。前者は、H. PLECHLがこれに大幅な増補改訂を加えた三巻本 Großausgabeで、約12万語を収録する。いずれもデータがやや古いため、ローカルな地名辞典がある場合はそちらも参照すべきである([CAENEGEM 1997] pp. 426-442を参照)。インターネット上には本書をベースにしたラテン語地名検索サイト[Orbis Latinus-NET]がある(ORBIS LATINUS: <http://www.columbia.edu/acis/ets/Graesse/> contents.html [1909年第2版 HA に依拠], RBMS-Latin Place Names: <http://www.lib.byu.edu/catalog/people/rilm/latin/names.htm>[1972年 GA版他に依拠])。】
- B5: Hermann OESTERLEY, HISTORISCH-GEOGRAPHISCHES WÖRTERBUCH DES DEUTSCHEN MITTELALTERS. Gotha 1883; Reprint, Aalen 1962.
【[OESTERLEY]:ドイツ語地名辞典。地名のラテン語形の検索可。】
- B6: LEXIKON FÜR THEOLOGIE UND KIRCHE. Begründet von Michael BUCHBERGER. 10 Bde. Freiburg im Breisgau 1930-38; 2. Aufl., 10 Bde., 1957-65, Registerbd. 1967, Ergänzungsb. 1-3, 1966-68, Sonderausgabe Bd. 1-14, 1986; 3., völlig neu bearbeitete Aufl., 1993-2000 (Bd. 9, San-Thomas) +.
【[*LThK]:カトリック系で最も信頼できる神学・教会事典。最新の第3版はまもなく完結。】
- B7: DICTIONNAIRE D'ARCHÉOLOGIE CHRÉTIENNE ET DE LITURGIE. Éd. par Dom F. CABROL/Dom H. LECLERCQ/H.-I. MARROU. 15 vol., Paris 1907-53.
【[DACL]:キリスト考古学・典礼事典。】
- B8: DICTIONNAIRE D'HISTOIRE ET DE GÉOGRAPHIE ECCLÉSIASIQUES. Éd. par A. BAUDRILLART... Vol. 1—, Paris 1912—.
【[*DHGE]:教会地理・歴史事典。1996年時点で第26巻(I)に到達。詳細は、樺山絢一編『歴史学事典 第6巻 歴史学の方法』(弘文堂 1998年)、119頁を参照。】
- B9: DICTIONNAIRE DE DROIT CANONIQUE. Contenant tous les termes du droit canonique avec un sommaire de l'histoire de ses institutions et de l'état actuel de la discipline. Éd par R. NAZ... 7 vol., Paris 1935-67.
【[DDC]:現在唯一信頼できる本格的カノン法事典。】
- B10: DICTIONNAIRE DE THÉOLOGIE CATHOLIQUE. Éd. par A. VACANT/E. MANGENOT/É. AMANN. 15 vol. Paris 1903-50.
【[DTC]:本格的カトリック神学事典。】
- B11: DICTIONNAIRE HISTORIQUE DE LA PAPAUTÉ. Éd par P. LEVILLAIN. Paris 1994.
【[DHP]:最新の教皇歴史事典。】
- B12: THE OXFORD DICTIONARY OF THE CHRISTIAN CHURCH. Ed. by F. L. CROSS, 1st.ed. 1957; 2nd.ed. 1974; 3rd.ed., ed. by E. A. LIVINGSTONE. Oxford/New York 1997.
【[ODCC]:英語圏で最も詳細な教会事典。人名項目・参考文献が充実し、ラテン語項目もある。】
- B13: 小林珍雄『キリスト教用語辞典』(第13版 東京堂書店 1989年:初版1954年)。
【(小林):第一部「キリスト教用語」は、158頁におよぶ、ラテン語・ドイツ語・英語・フランス語―日本語の辞典となっており、訳語への賛否は別として、調査語がテクニカル・タームとして存在するか否かの確認に役立つ。】
- B14: 上智大学・獨逸ヘルデル社共編『カトリック大辞典』(I-V 富山房 1940-60年);上智学院新カトリック大事典編纂委員会編『新カトリック大事典』(研究社 1996年以降刊行中)。
【[カトリック大辞典] [新カトリック大事典]:前者については、第5巻収録の詳細な事項索引に、キリスト教に関する数多くのラテン語語彙が含まれている。後者は、現在第2巻(一シモ)まで刊行済み。】
- B15: HANDWÖRTERBUCH DER DEUTSCHEN RECHTSGESCHICHTE. Hrsg. von A. ERLER/E. KAUFMANN. 5 Bde. Berlin 1964-98.
【[*HRG]:包括的なドイツ法制史用語事典。スタンダード。】
- B16: J. BARON, GRAND DICTIONNAIRE DE DROIT DU MOYEN AGE (Ius Medii Aevi 5). 9 fasc. Namur 1972-74.
【[BARON]:中世ラテン語・フランス語・ドイツ語の法律用語リストで、項目語には仏語訳・語源説明・史料引用が施

される。ビブリオも充実。主にフランス、ドイツ、オランダの文書館史料に基づく。fasc. 9 は *chario* まで収録するが、著者逝去によって企画は中断。】

- B17: ハインリヒ・ミッタイス著、ハインツ・リーベリッヒ改訂／世良晃志郎訳『ドイツ法制史概説 改訂版』(創文社 1971 年); Fr. オリヴィエ・マルタン著／塙浩訳『フランス法制史概説』(創文社 1986 年); ジョン・ハミルトン・ペイカー／小山貞夫訳『イングランド法制史概説』(創文社 1975 年)。
【〔ミッタイス〕〔オリヴィエ・マルタン〕〔ペイカー〕: 法制史関係のラテン語について、原語索引からの検索が有効。】
- B18: DIE DEUTSCHE LITERATUR DES MITTELALTERS. VERFASSELEXIKON. 5 Bde. Unter Mitarbeit zahlreicher Fachgenossen, hrsg. von Wolfgang STAMMLER/Karl LANGOSCH. Berlin/Leipzig 1933-55; 2. Aufl., ca. 12 Bde., hrsg. von Kurt RUH et al. Berlin 1978-2000+.
【〔VERFASSELEXIKON〕: ドイツ語圏の中世作家・作品に関する最も信頼できる事典。第 2 版も本体である 1 卷から 10 卷まではすでに完結し、現在「補遺」第 1 卷に相当する第 11 卷(2000)が刊行開始。】
- B19: TUSCULUM-LEXIKON griechischer und lateinischer Autoren des Altertums und des Mittelalters. 3., neu bearbeitete und erw. Aufl., hrsg. von Wolfgang BUCHWALD/Armin HOHLWEG/Otto PRINZ. München 1982; fr., erw. Ausg.: DICTIONNAIRE DES AUTEURS GRECS ET LATINS DE L'ANTIQUITÉ ET DU MOYEN ÂGE. Tr. par J. D. BERGER/J. BILLEN. Turnhout 1991.
【〔TUSCULUM〕: 古代・中世のギリシア語・ラテン語作家事典。コンパクトながら、充実。】
- B20: GLOSSAR ZUR FRÜHMITTELALTERLICHEN GESCHICHTE IM ÖSTLICHEN EUROPA. Hrsg. von Jadran FERLUGA/Manfred HELLMANN/Herbert LUDAT. Serie A: LATEINISCHE NAMEN BIS 900. Bd. 1-3+, Wiesbaden 1973-89+.
【〔GLOSSAR〕: 初期中世東欧におけるラテン語形人名リスト。この企画自体(seit 1955/56 in Freiburg, Münster und Gießen)は「スラブ世界の生成 Genese der slavischen Welt」を理解するための史料集成を最終目的としており、そのための準備作業として、シリーズ A: ラテン語固有名詞、シリーズ B: ビザンツ固有名詞、シリーズ C: スラブ固有名詞を、また企画に関連する研究を BEIHEFT として刊行している。】
- B21: Ulysse CHEVALIER, RÉPERTOIRE DES SOURCES HISTORIQUES DU MOYEN ÂGE. BIO-BIBLIOGRAPHIE. 2 vol. 2^e éd., Paris 1905-07.
【〔CHEVALIER-BIO〕: フランス中世史史料中に登場する人名事典。簡単な人物紹介と生没年・関連文献を記載。】
- B22: Ulysse CHEVALIER, RÉPERTOIRE DES SOURCES HISTORIQUES DU MOYEN ÂGE. TOPO-BIBLIOGRAPHIE. 2 vol., Montbéliard 1894-1903; Reprint, 1959.
【〔CHEVALIER-TOPO〕: 上記事典(B21)の地名事典版。地名の簡単な紹介とラテン語形、関連文献を記載。】
- B23: PROVERBIA SENTENTIAEQUE LATINITATIS MEDII AEVI. Lateinische Sprichwörter und Sentenzen des Mittelalters in alphabetischer Anordnung. 6 Bde. Hrsg. von Hans WALThER. Göttingen 1963-9; PROVERBIA SENTENTIAEQUE LATINITATIS MEDII AC RECENTIORIS AEVI=Lateinische Sprichwörter und Sentenzen des Mittelalters und der frühen Neuzeit in alphabetischer Anordnung(Carmina medii aevi posterioris Latina ; 2 : N.S.). Aus den Nachlässen von Hans WALThER. Hrsg. von Paul Gerhard SCHMIDT. Göttingen 1982—.
【〔PROBERBIA〕: 中世の諺に関する包括的な事典。編者 H. WALThER(1884-1971)はこの分野のパイオニア。】
- B24: Jakob WERNER, LATEINISCHE SPRICHWÖRTER UND SINNSPRÜCHE DES MITTELALTERS. Heidelberg 1912; 2., überarb. Aufl., hrsg. von Peter FLURY. Darmstadt 1966.
【〔WERNER〕: 同じく中世の諺事典だが、全 1 卷のコンパクトなもの。ラテン語だけでなく俗語(ドイツ語)も収録。】
- B25: THESAURUS PROVERBIORUM MEDII AEVI. Lexikon der Sprichwörter des romanisch-germanischen Mittelalters. 11 Bde.+. Begründet von Samuel SINGER, hrsg. von Kuratorium Singer der Schweizerischen Akademie der Geistes- und Sozialwissenschaften. Berlin 1995—.
【〔TPMA〕: S. SINGER, 1860-1948。中世ロマンス語・ドイツ語の本格的諺事典。現在第 11 卷(-Tröster)まで刊行。】
- B26: Josef SZÖVÉRFFY, WELTLICHE DICHTUNGEN DES LATEINISCHEN MITTELALTERS. EIN HANDBUCH. Bd. 1: Von den Anfängen bis zum Ende der Karolingerzeit. Berlin 1970.
【〔SZÖVÉRFFY-1〕: ラテン中世の世俗詩事典。第 1 卷はカロリング朝末まで。】

[C] 古典ラテン語辞典 Klassiklateinisches Wörterbuch

以下にあげるものは、代表的な古典ラテン語辞典のみである。

- C1: THESAURUS LINGuae LATINAE. Leipzig/Stuttgart 1900—.
【〔THESAURUS〕〔*TLL〕: ドイツの文献学者 EDUARD WÖLFFLIN によって 19 世紀末に創設された古典ラテン語集成編纂計画。WÖLFFLIN は 1884 年に雑誌 ARCHIV FÜR LATEINISCHE LEXIKOGRAPHIE UND GRAMMATIK を創刊、その誌上に辞典編纂のための準備的論稿を掲載した。1893 年には THEODOR MOMMSEN の提案に基づき、ベルリン・ゲッティングン・ライプツィヒ・ミュンヘン・ウィーンの 5 つの学士院 AKADEMIE DER WISSENSCHAFTEN による TLL 編纂が決定された。編集本部はミュンヘン。1900 年以降刊行が始まり、当初の予想をはるかに上回る「世紀の事業」として、今日まで継続されている。本辞典編纂の歴史・編集方針・利用法については、1987 年以降「国際

THESAURUS 委員会のメンバーとなっている日本学士院内「THESAURUS 委員会」により刊行された小冊子『古典ラテン語集成案内』(村川堅太郎・久保正彰著、1989年)に詳細な記述がある。「A」から始まり、1996年時点で t. X, fasc. 9, 2(-pro)まで到達。】

- C2: **TOTIUS LATINITATIS LEXICON (AEGIDIUS FORCELLINI)**, consilio et cura Iacobi Faccioli opera et studio Aegidii Forcellini alumni Seminarii Patavini lucubratum. I-IV. Padova 1771; 2. ediz. Padova 1805; 3. ediz. Padova 1827-31; 4. ediz. Padova 1864-98, completata poi, anche con l'Onomasticon, da G. PERIN; 5. ediz. Padova 1940; V. de VIT, 10 vols., Prato 1858-1887; R. BUSA Totius latinitatis lemmata quae ex Aeg. Forcellini Patavini editione 1940 a fronte a tergo atque morphologice opera IBM automati ordinaverat Roverts BUSA S.I. Milano 1988.
【(FORCELLINI): EGIDIO FORCELLINI, 1688-1768. ラテン語語彙と、イタリア語・フランス語・ドイツ語・スペイン語・英語による equivalents が続き、そのあとにラテン語原典からの引用がある。収録対象となっているラテン語語彙は古典ラテン語および初期キリスト教ラテン語であり、原則として 6 世紀まで、ものによっては 8 世紀までが対象。1940 年の版では、全 6 卷のうち最初の 4 卷は A-Z までの語彙辞典、5・6 卷は固有名詞辞典となっている(G. PERIN, ONOMASTICON TOTIUS LATINITATIS. 1913-26)。英語版、ドイツ語版もある。】
- C3: Heinrich und Karl Ernst GEORGES, [AUSFÜHLICHES (ab 7. Aufl.)] LATEINISCH-DEUTSCHES HANDWÖRTERBUCH. 1.-7. Aufl. 1855-80, 8. Aufl., besorgt von H. GEORGES. Hannover 1912/19; KLEINES LATEINISCH-DEUTSCHES HANDWÖRTERBUCH. 2 Bde., 1864, fortgesetzt von H. GEORGES, 9. Aufl., 1909; KLEINES DEUTSCH-LATEINISCHES HAND-WÖRTERBUCH. 1864, fortgesetzt von H. GEORGES, 7. Aufl., 1911.
【(GEORGES): K. E. GEORGES, 1806-95. ゴータ (Gotha) の辞典編纂家。早くからシェラー・羅独辞典 (SCHELLERS LATEINISCH-DEUTSCHES LEXIKON. 8.-10. Aufl. 1837-48) の改訂に携わり、その後自らの名を冠して出版。現在でもリプリントで入手可能な、ドイツ語圏における古典ラテン語辞典のスタンダード。】
- C4: Hermann MENGE, LANGENScheidts GROSSWÖRTERBUCH LATEINISCH. T. 1: Lateinisch-Deutsch, unter Berücksichtigung der Etymologie von Hermann MENGE. 21. Aufl., T. 2: Deutsch-Lateinisch, von Otto GÜTHLING. 13. Aufl. Berlin 1981-82.
【(MENGE): H. MENGE, 1841-1939. LANGENScheidt ラテン語シリーズで最も大きなもの。この他に Handwörterbuch, Großes Schulwörterbuch, Taschenwörterbuch がある。ドイツ語圏では定番で、とくに Schulwörterbuch (11. Aufl. 1997) は適度な分量で使い易い。】
- C5: Josef Maria STOWASSER, LATEINISCH-DEUTSCHES SCHUL- UND HANDWÖRTERBUCH. Große Ausgabe. Leipzig 1914.
【(STOWASSER): J. M. STOWASSER, 1854-1910. オーストリアのギムナジウム教師、古典文献学者、翻訳家。今日でもドイツ語圏のギムナジウム、大学で利用される古典ラテン語辞典。】
- C6: A LATIN DICTIONARY. Founded on Andrews' Edition of Freund's Latin Dictionary, revised, enlarged and in great part rewritten by Charlton T. LEWIS and Charles SHORT. Oxford 1879.
【(LEWIS & SHORT): ドイツ人 WILHELM FREUND による WÖRTERBUCH DER LATEINISCHEN SPRACHE. 4Bde. Leipzig 1834-45 ([SCHELLER:C3*] [FORCELLINI:C2]に基づく) の E. A. ANDREWS による縮約英訳版 (1850) (本書出版当時まで、英米圏で最も広く用いられていた羅英辞典) をベースに、これを大幅に改訂・増補したもの。19 世紀中葉における言語学・文献学的研究の発展を受け、その水準に見合った辞典を、ということで作られた。当初はたんなる ANDREWS の改訂版として企画され、Prof. HENRY DRISLER によって編纂される予定であったが、より本格的で、大幅な改訂の必要を痛感した DRISLER が、LEWIS & SHORT に企画を委ねた。本書のうち「A」で始まる項目は SHORT (Prof. of Latin in Columbia College, New York) が、それ以外は全て LEWIS が担当。】
- C7: OXFORD LATIN DICTIONARY. Ed. by P. G. W. GLARE. Oxford 1968-1982. Combined Editon in 1982, reprinted in 1983, 1984, 1985, 1988, 1990, 1992, 1994, reprinted with corrections in 1996.
【(*OLD): 1931 年 OXFORD UNIVERSITY PRESS において、[LEWIS & SHORT:C6]、[THESAURUS:C1] とは異なる、OED スタイルの、まったく新しいラテン語辞典の編纂が企画された。Editor には Prof. A. SOUTER (University of Aberdeen) が任命され、OED 編纂局から J. M. WYLIE が assistant editor に選ばれた。1933 年からデータ収集作業が開始され、最終的には 100 万件に上る項目カードが集められた。第二次世界大戦による中断の後、作業は、編集部の人事異動を経ながら進められ、1968 年編集主幹 P. G. E. GLARE のもとで分冊刊行が開始された。その後 2 年で一分冊のベースで着実に刊行が進み、1982 年 2 月に完了。対象となるラテン語は、A. D. 200 年までの古典ラテン語で、ユスティニアヌス法典に登場する法学者の文献は(それが A. D. 3 世紀に及ぶ場合でも)収録された一方で、いわゆる「キリスト教ラテン語 Christian Latin」の収録は、教父著作も含めて断念された(その代わりとして、[SOUTER:C11] が 1949 年に刊行)。編集方針の OED への依拠は、項目レイアウトにまで及んでいる。】
- C8: AN ELEMENTARY LATIN DICTIONARY. Ed. by Charlton T. LEWIS. Oxford 1890; 1981.
- C9: CHAMBERS MURRAY LATIN-ENGLISH DICTIONARY. Ed. by William SMITH and John LOCKWOOD. Edinburgh 1992.
- C10: LE GRAND GAFFIOT: DICTIONNAIRE LATIN-FRANÇAIS. Éd. par Félix GAFFIOT. Nouv. éd., revue et augmentée sous la direction de Pierre FLOBERT. Paris 2000.

【[GAFFIOT]: F. GAFFIOT 1870-1937。フランスの代表的羅仏辞典。初版は 1934 年。2000 年に大幅な改訂を経た新版が上梓された。】

- C11: Alexander SOUTER, A GLOSSARY OF LATER LATIN TO 600 A.D. Oxford 1949; Reprint 1996.

【[SOUTER]: A. SOUTER, 1873-1949. [OLD:C7] の編纂過程において対象外となったラテン語 (A.D. 180 年以降) のうち、本書編纂時において信頼できる Edition が刊行されているラテン作家、すなわちセヴィーリヤのイシドールス、尊者ペーダより前ということで、紀元 600 年という下限が設定された。本語彙集の元になっているのは、著者ならびにその師 J. E. B. MAYER による、[LEWIS & SHORT:C6] に書き込まれたメモである。したがってその収録語彙は OLD および L&S から漏れたものだけである。各項目には至極簡単に英訳と出典箇所への指示が一つ書かれているばかりである、そのコンパクトな構成からもわかるように、後期ラテン=クリスチャン・ラテンのテクストを読む学生が OLD や L&S とともに活用できるようにと編まれたもの。】

- C12: Alois WALDE, LATEINISCHES ETYMOLOGISCHES WÖRTERBUCH (Sammlung indo-germanischer Lehrbücher. 2. Reihe, 1. Bd.). Heidelberg 1906.

【[WALDE]: A. WALDE, 1869-1924。初版は 1905-6 年。その後現在まで 5 版を数える。[ERNOUT&MEILLET: C13] と比べ、全般に簡潔にして濃密な記述を特徴とし、学術文献や他の辞典への参考指示がより充実している。第 1 卷補遺は、巻末の 842-72 頁に収録。ELSPETH BERGER により作成された第 3 卷は、項目別インデックス。】

- C13: DICTIONNAIRE ÉTYMOLOGIQUE DE LA LANGUE LATINE. Histoire des mots. A. ERNOUT et A. MEILLET. Paris 1932; 4^e éd., 4^e tirage, augum. d'additions et de corrections nouv., par Jacques ANDRÉ, Paris 1985.

【[ERNOUT&MEILLET]: 最良にして、最も使い勝手のよいラテン語語源辞典。MEILLET が単語の語源を、ERNOUT が古典期から中世にいたるまで、さらにはロマンス語、ケルト語、ゲルマン語、スラブ語におけるその残存についての語族史を担当。】

- C14: André LE BOEUFFLE, ASTRONOMIE, ASTROLOGIE -LEXIQUE LATIN. Paris 1987; ID., LE VOCABULAIRE LATIN DE L'ASTRONOMIE. Lille 1973.

【[BOEUFFLE 1987][BOEUFFLE 1973]: 編者は元アミアン大学教授。コンパクトなラテン天文学用語語彙集。】

[D] 文法書 Grammatik

[中世ラテン語 Mittellatein, latin médiéval]

- D1: Peter STOTZ, HANDBUCH ZUR LATEINISCHEN SPRACHE DES MITTELALTERS. Bd. 1 (I: Einleitung, II: Lexikographische Praxis, III: Wörter und Sachen, IV: Lehnwortgut), München 2002; Bd. 2 (V: Bedeutungswandel, VI: Wortbildung), München 2000; Bd. 3 (VII: Lautlehre), München 1996; Bd. 4 (VIII: Formenlehre, IX: Syntax, X: Stilistik), München 1998; Bd. 5 (Bibliographie, Quellenübersicht und Register), München 2003.

【[STOTZ]: 史上初の本格的中世ラテン語辞典。2003 年に完結予定(全 5 卷)。本文参照。】

- D2: Karl STRECKER, EINFÜHRUNG IN DAS MITTELLATEIN. Berlin 1928, 3. erw. Aufl., 1939; revid., eng. Ausg.: INTRODUCTION TO MEDIEVAL LATIN. Tr. by R. B. PALMER. Berlin 1957; fr. Ausg.: INTRODUCTION A L'ÉTUDE DU LATIN MÉDIÉVAL. 3^e éd., revue et augmentée par P. van de WOESTIJNE. Lille 1948.

【[STRECKER]: K. STRECKER, 1861-1945。著者はドイツにおける中世ラテン文献学の草分けの一人で、L. TRAUBE や P. VON WINTERFELD とともに、MGH POETAE LATINI MEDII AEVI シリーズの編者。中世ラテン文献学の全領域を、詳細な文献指示とともに略説。英語版が最新。】

- D3: Karl LANGOSCH, LATEINISCHES MITTELALTER. Einleitung in Sprache und Literatur. Darmstadt 1963.

【[LANGOSCH]: K. LANGOSCH, 1903-92。ゲルマニスト系 (GUSTAV ROETHE 門下) の中世ラテン文献学者。中世ラテン文献学の、古典ラテン文献学からの自立を目指す。1963 年以降ケルン大学正教授。雑誌 [MJ:G2] の創刊 (1964 年)、また [VERFASSERLEXIKON:18] の編纂など、組織面で力を発揮。彼の経歴については [MJ] Bd. 27 (1992), S. 1-4 を、業績については [MJ] Bd. 29, 1 (1994), S. 157-170 を参照。】

- D4: Martin R. P. McGuire, INTRODUCTION TO MEDIEVAL LATIN STUDIES. A Syllabus and Bibliographical Guide. Washington 1964; 2nd. ed., Washington 1977.

【[McGUIRE]】

- D5: Ludvig Dag NORBERG, MANUEL DE PRATIQUE DE LATIN MÉDIÉVAL (Collection Connaissance des langues, vol. 4). Paris 1968.

【[DAG NORBERG]: L. D. NORBERG, 1909-96。本書は、50 頁に及ぶ中世ラテン語史と、各時代・各ジャンル (説教、書簡、年代記、頌詩、散文など) から厳選されたテクスト解釈の部から構成される。その解釈部は、選択されたテクストの解題、ラテン語テクスト、フランス語対訳、そして重要文法事項の丁寧な解説という編成で、テクスト数は 11 と少なめだが、じっくり学べるスタイルとなっている。】

- D6: Santiago VILLIMER LLAMAZARES, ESTUDIOS DE LATIN MEDIEVAL: Documentos de la

- cancilleria castellana ss. XIV-XV. Prologo del Dr. Bravo LOZANO. Valladolid 1976.
- D7: Maurilio Pérez GONZÁLEZ, EL LATÍN DE LA CANCILLERÍA CASTELLANA (1158-1214) (Acta Salmanticensia, Filosofía Letras 163). Salamanca 1985.
 [[GONZÁLEZ]:アルフォンソ8世期の証書に使われているラテン語について、原証書を言語学的に分析したもの。その記述は記法、音声学、形態論、統語論、語彙および、分析対象となった証書の数は1000点以上に及ぶ。]
- D8: Monique GOULLET/Michel PARISSE, APPRENDRE LE LATIN MÉDIÉVAL. Manuel pour grands commençants. Paris 1996.
 [[GOULLET-PARISSE]:初学者が短期間で中世ラテン語文法のエッセンスを学びとができるように配慮して、「課」構成となっている。名詞の格変化、動詞の活用、時制など中世ラテン語の基本文法が23課に分けられて学びやすい分量に配置されている。各課ではとくに古典ラテン語との違いを意識して説明しており、親切。]
- D9: G. CREMASCHI, GUIDA ALLO STUDIO DEL LATINO MEDIEVALE. Padova 1959.
- D10: 国原吉之助『中世ラテン語入門 Rudimenta Mediae Latinitatis』(南江堂 1975年)。
 [[国原 1975]:著者は1926年生まれ、京都大学西洋古典学出身で、名古屋大学教授(西洋古典学)。本書は三部構成となっており、第一部では中世ラテン語の歴史が通観され、第二部では中世ラテン文法として、綴り・発音、語彙、語形論、統語論について、要点列挙というかたちでごく簡単な説明を施し、第三部では中世ラテン語テクストのうち、説話、歴史・史料、隨筆・書簡の各分野からそれぞれ文章を選び、それについて主に語彙的説明(部分訳)を加えている(対訳はない)。第一部の通史はかなり詳細、第二部の文法はコンパクトながら、要点を押さえている。第三部は、文法的解説がほとんどなく、リーダーとしては不十分である。全体として、文法書というよりは、入門書。】
- D11: P. BOURGAIN/M.-CL. HUBERT, LATIN MÉDIÉVAL (L'Atelier du médiéviste). Turnhout, en préparation.
- D12: E. A. GOODER, LATIN FOR LOCAL HISTORY INCLUDING A WORD-LIST AND A MEDIEVAL VOCABULARY. 2nd. ed. London 1978.
- D13: V. PALADINI/M. DE MARCO, LINGUA E LETTERATURA MEDOLATINA. Bologna 1970.
- D14: A. FONTÁN PÉREZ/A. MOURE CASAS, ANTOLOGIA DEL LATÍN MEDIEVAL. Madrid 1987.
- [俗ラテン語 Vulgärlatein, latin vulgare]
- D15: F. G. MOHL, INTRODUCTION À LA CHRONOLOGIE DU LATIN VULGAIRE. Étude de philologie historique. Paris 1899.
- D16: H. F. MULLER, A CHRONOLOGY OF VULGAR LATIN. Halle 1929.
- D17: C. H. GRANDGENT, AN INTRODUCTION TO VULGAR LATIN. Boston 1934.
 [[GRANDGENT]:著者はハーヴィード大学ロマンス語講座教授。ロマンス語科学生向けの入門書。】
- D18: G. ROHLFS, SERMO VULGARIS LATINUS. 3. Aufl. Tübingen 1969.
- D19: K. VOSSLER, EINFÜHRUNG INS VULGÄRLATEIN. Hrsg. von H. SCHMECK. München 1954.
- D20: C. BATTISTI, AVVIAMENTO ALLO STUDIO DEL LATINO VOLGARE. Bari 1949.
- D21: T. H. MAURER Jr., GRAMÁTICA DO LATIM VULGAR. Rio de Janeiro 1959.
- D22: Manuel C. DÍAZ Y DÍAZ, ANTOLOGIA DEL LATÍN VULGAR. 2. ed. Madrid 1962.
- D23: R. A. HAADSMA/J. NUCHELMANS, PRÉCIS DE LATIN VULGAIRE. 2^e éd. Groningen 1966.
- D24: G. REICHENKRON, HISTORISCHE LATEIN-ALTROMANISCHE GRAMMATIK, I: Einleitung. Das sogenannte Vulgärlatein und das Wesen der Romanisierung. Wiesbaden 1965.
- D25: Joseph HERMAN, LE LATIN VULGAIRE (Que sais-je? 1247). Paris 1967; 3^e éd. 1975; 新村・国原訳『俗ラテン語』(文庫クセジュ 498、白水社 1971年)。
- D26: Veikko VÄÄNÄNEN, INTRODUCTION AU LATIN VULGAIRE. Paris 1963; 3^e éd. 1981.
 [[VÄÄNÄNEN]:著者はヘルシンキ大学教授。俗ラテン語文法の定番。】
- D27: LATIN VULGAIRE, LATIN TARDIF, 1987—.
 [[LAT.VUL.-TAR.]:3年に一度開催される、古典ラテン・ロマンス語文献学者コロキウムのコロック。】
- [後期ラテン語 Spätlatein, latin tardif]
- D28: Einar LÖFSTEDT, LATE LATIN. Oslo et al. 1959; it. transl.: IL LATINO TARDO. Aspetti e problemi, con una nota e appendice bibliografica di Giovanni Orlando. Paideia 1980.
 [[LÖFSTEDT]:後期ラテン語文法の定番。著者については本文参照。】
- [教会・キリスト教ラテン語 Kirchenlatein/Christl.Latein, latin chrétien]
- D29: J. SCHRIJNEN, CHARAKTERISTIK DES ALTCHRISTLICHEN LATEINS. Nijmegen 1932.
- D30: M. SCHUSTER, ALTCHRISTLICHES LATEIN. Leipzig 1933.

- D31: John F. COLLINS, A PRIMER OF THE ECCLESIASTICAL LATIN. Washington, D. C. 1988.
【(COLLINS):教会ラテン語の入門書。全部で35の单元に分けられた構成は初学者向けテキストとしての利用を第一に考えている。教会ラテン語といつても、ヒエロニムスのウルガータ聖書からカノン法、典礼書、スコラ哲学、贊美歌、教皇勅書とその内容は多岐にわたるが、本書では、ヒエロニムス(340-420)およびアンブロシウス(340-397)のラテン語を基礎としている。】
- D32: Giuseppe CALIÒ, IL LATINO CRISTIANO. Bologna 1965.
- D33: A. DE PRISCO, IL LATINO TARDOANTICO E ALTOMEDIEVALE. Roma 1991.
- D34: O. GARCÍA DE LA FUENTE, LATÍN BÍBLICO E LATÍN CRISTIANO. Madrid 1994.
- D35: J. RIES, EINFÜHRUNG IN DIE LATEINISCHE KIRCHENSPRACHE. 2. Aufl. Regensburg 1922.
- D36: H. P. V. NUNN, AN INTRODUCTION TO THE STUDY OF ECCLESIASTICAL LATIN. 3rd. ed. Oxford 1963.
- D37: K. RAHNER, DAS LATEIN ALS KIRCHENSPRACHE. Einsiedeln 1962; it. Ausg., Brescia 1964.
- D38: R. J. O'BRIEN, A DESCRIPTIVE GRAMMAR OF ECCLESIASTICAL LATIN. Chicago 1965.
- D39: Albert BLAISE, MANUEL DU LATIN CHRÉTIEN. Strasbourg 1955; A HANDBOOK OF CHRISTIAN LATIN. Tr. by Grant C. ROTI. Washington, D. C. 1994.
【(BLAISE 1955):もともと(BLAISE 1954: A6)のイントロダクションとして書かれたもの。1989年にはアップ・デートされたビブリオが、G. SANDERS/M. van UYTFANGHE, BIBLIOGRAPHIE SIGNALÉTIQUE DU LATIN DES CHRÉTIENS (Corpus Christianorum, Lingua Patrum vol. 1)としてBREPOLSから出版されている。】

[E] リーダー Lesebuch

- E1: Keith SIDWELL, READING MEDIEVAL LATIN. Cambridge 1995.
【(SIDWELL):英国系。K. SIDWELLは、定評ある古典ラテン語リーダー(*Reading Latin*, Cambridge 1986)の著者。収録テクストはキリスト教・中世ラテン語文献の各分野からバランスよく、万遍なく選ばれており、ときに図版をともなった文法解説は、テクスト紹介文とともに至極丁寧。現時点では最良の選択肢。】
- E2: Karl Pomeroy HARRINGTON, MEDIEVAL LATIN. 2nd. ed., rev. by Joseph PUCCI. Chicago 1997.
【(HARRINGTON):初版は1925年にまで遡る、米国系のリーダー。原著者(1861-1953)はWesleyan University古典学教授。約70年ぶりに改訂されたこの第2版が最新版。350-1350年の様々な分野のテクストを収録。】
- E3: H. SCHULZE, MITTELLATEINISCHES LESEBUCH. Paderborn 1960.
- E4: Gerhard THEUERKAUF, EINFÜHRUNG IN DIE INTERPRETATION HISTORISCHER QUELLEN. SCHWERPUNKT: MITTELALTER(UTB 1554). Paderborn et al. 1991; 2. Aufl., Paderborn et al. 1997.
【(THEUERKAUF):全体は[A]、[B]二部から構成され、[A]では史料解釈例を題材に、中世史における史料分析・解釈の何たるかを体得させることを目的とし、[B]では、書簡・証書・法史料・社会理論・歴史叙述・韻文・旅行記・絵画・現物資料といった史料カテゴリーごとに史料解釈例をあげ、各ジャンルの特徴把握を目指す。たんなるテクストの内容理解に満足せず、歴史研究者として史料から何を汲み取るべきかという点まで踏み込んでいる点が大きな特徴。】
- E5: Olivier GUYOTJEANNIN, ARCHIVE DE L'OCCIDENT. T. 1: Le Moyen Age(V^e-XV^e siècle). Paris 1992.
【(ARCHIVE DE L'OCCIDENT):中世テクストのアンソロジーで、非ラテン語テクストも含む。文法解説ではなく、テクストへの短い導入文とフランス語対訳があるのみ。】

[F] ビブリオ Bibliographie ([STOTZ:D1]Bd.5(2003), [MEL:G10]も参照)

- F1: MEDIEVAL LATIN. AN INTRODUCTION AND BIBLIOGRAPHICAL GUIDE. Ed. by F. A. G. MANTELLO/A. G. RIGG. Washington, D.C. 1996.
【(MED.LAT.):アメリカ・カトリック大学、カナダ・トロント大学の研究者が中心となって編纂した、本格的中世ラテン語入門・文献目録。全体は三つのパートにわかれ、Part 1 では中世ラテン語研究に不可欠な道具類(ビブリオ・辞典・テクスト集成・専門誌など)が、Part 2 では中世ラテン文献学の研究分野(統語論・音韻論など)ならびに中世ラテン語の種類(聖書・カノン法・法・証書・商業・数学・天文学・植物学など各部門で使われたラテン語の性格について)が、Part 3 では中世ラテン文学の各ジャンル(叙事詩・諺・戯曲・伝記・聖人伝・歴史叙述・説教など)が、全体でおよそ800頁にわたり、詳細な文献目録(AAからHDまで分類)とともに紹介・解説されている。中世ラテン語についての、現在最も重要な入門書。ペーパーバックあり。】
- F2: INTRODUCTION AUX SOURCES DE L'HISTOIRE MÉDIÉVALE (Corpus Christianorum, Continuatio Mediaevalis). R. C. van CAENELEM, avec la collaboration de F. L. GANSHOEF. Traduction de l'anglais par B. van den ABEELE. Nouv. éd. mise à jour, par L. JOCQUÉ. Turnhout

1997; KURZE QUELLENKUNDE DES WESTEUROPAISCHEN MITTELALTERS. Eine typologische, historische und bibliographische Einführung. Göttingen 1962; GUIDE TO THE SOURCES OF MEDIEVAL HISTORY. New York 1978.

【[CAENEDEM 1997]:初版は1962年ヘント刊行のオランダ語版で、著者 VAN CAENEDEM が1955/56年以降ヘント大学において、L. GANSHOF の後任としておこなった講義「歴史のエンチクロペディ:中世篇」に端を発する。本書編纂に際しては、前任者 GANSHOF が 1923/24-1954/55 年におこなった講義のためのメモも利用されている。CORPUS CHRISTIANORUM シリーズのフランス語版(1997年)が最新版で、文献・註が大幅に増補改訂されている(縮約版もある)。16-20世紀の中世史史料編纂史をあとづけた「Introduction historique»(pp. 217-276)は、一読に値する。】

- F3: BIBLIOGRAPHIE ZUR GESCHICHTE DES MITTELALTERS (dtv 2490). Hrsg. von Alfred HEIT/ Ernst VOLTMAR. München 1997.

【(dtv-BMG):中世ラテン・プロパーのビブリオではなく、中世史の最新ビブリオ。戦後の研究が中心で、個別論文は対象外。構成は、ビブリオ、雑誌、シリーズ、論文集、展覧会カタログ、入門書、研究機関、参考図書、地域(ドイツ語圏)別文献目録、時代(初期中世・盛期中世・後期中世)別文献目録、中世史研究分野別文献目録、歴史補助学、史料刊本・史料集成・レグスター(文書要覧)等となっている。】

[G] 雑誌 Periodika

ここであげるのは、中世ラテン文献学に関する狭義の専門誌のみである。中世史全般を扱った他の雑誌にも、関連論稿は数多く掲載されているが、中世ラテン文献学・辞典編纂に関する情報は、これらの雑誌の書評・新刊紹介欄においてチェックすることができる。中世ラテン語の歴史学的研究に関しては、中世史プロパーの雑誌を参照しなければならない。

- G1: BULLETIN DU CANGE: ARCHIVVM LATINITATIS MEDII AEVI. Éd. par Union Académique Internationale. T. 1 (1924) —, Paris.

【(*ALMA):「新デュ・カンジュ辞典(中世ラテン語辞典)」の編纂を目指す「国際学士院連盟(UAI)」が、その編纂事業を補佐・準備する場として 1924 年に刊行を開始した、中世ラテン語文献学・辞典編纂学に関する最初の専門誌。内容は通常、雑誌論文・雑録・書評・年次動向からなるが、企画号では、たとえば辞典の分冊を収録することもある(「中世イタリア語辞典」[A15]等)。中世ラテン語辞典の編纂状況を知りたいときには、最初に調べるべき雑誌。本文参照。】

- G2: MITTELLATEINISCHES JAHRBUCH. Internationale Zeitschrift für Mediävistik. Bd. 1 (1964) —, Köln et al.

【(*MJ):1964 年 KARL LANGOSCH によって創刊された中世ラテン文献学の専門誌。主にドイツ語圏の研究者が中心であるが、北欧や東欧、合衆国、イギリスなど国際的な執筆陣を擁する。掲載内容としては、文献学の論文のほかに、斯学の研究状況をサーヴェイするのに適した幅広い書評と編集者の関与する各種研究計画の年次報告がある。】

- G3: FILOLOGIA MEDIOLATINA. Rivista della Fondazione Ezio Franceschini. Centro italiano di studi sull'alto Medioevo. T. 1 (1994) —, Spoleto.

【(FM):1994 年に創刊されたばかりの、中世研究・中世ラテン語文献学専門誌。年刊。使用言語は伊・独・英・仏・西など。編集陣の構成は国際的で、著名な編集顧問團に支えられる(M. C. DÍAZ Y DÍAZ, P. STOTZ, B. LÖFSTEDT など)。同類雑誌との大きな相違点は、そのテーマを「中世ラテン語テクストの史料批判と伝承史」に限局していることであろう。そのため寄稿論文は、中世ラテン語テクストの編集に携わっている研究者の「工房(現場)報告」が主調となっている。本拠がスボレトの「イタリア初期中世史研究センター」に置かれていることからも予想されるように、執筆陣は他の類誌に比べイタリア人の割合が高い。また、書評・雑記欄はなく、論考とインデックスのシンプルな構成となっている。】

- G4: JOURNAL OF MEDIEVAL LATIN. Vol. 1 (1991) —, Turnhout.

【(JMLat) [*JML]:カナダの中世ラテン文献学者たち(トロント大学中心)が創刊した、英語圏の学者を対象とする中世ラテン文献学の専門雑誌。編者の序にあるように、本誌は、英語圏における中世ラテン語研究の重要性を広く知つてもらい、英語圏での研究が進展することを願って創られたもの。ゆえに論考も英語・フランス語のみで、書評対象も両言語で書かれたものが中心。投稿募集論文の対象は中世ラテン文献学が対象とするありとあらゆる分野に及び、マニュスクリプト研究や刊本作成、翻訳なども、言語学的研究や文学研究、中世ラテン語文化研究(学校史、図書館史など)等とともに含まれる。雑誌の発行母体は、北米中世ラテン語協会 THE NORTH AMERICAN ASSOCIATION OF MEDIEVAL LATIN。投稿者には、「記憶(術)」研究でわが国でも知られる MARY CARRUTHERS 他がいる。】

- G5: ERANOS. Acta philologica Suecana. Uppsala 1896—.

【(ERANOS):スウェーデンにおける最古の、古典・中世ラテン文献学専門誌。1896 年の創刊号以来の掲載論文リストは、HP(<http://www.klassiska.uu.se/eranos/eranos.html>)で得ることができる。】

- G6: CLASSICA ET MEDIAEVALIA. Revue danoise de philologie et d'histoire. Crée par William NORVIN. Vol. 1 (1938) —, København(Copenhagen).

【(CLAS.MED.):デンマーク・オーフス大学古典・中世研究所主催の文献学・歴史学専門誌。】

- G7: CAHIERS DE L'INSTITUT DU MOYEN-AGE. GREC ET LATIN. Vol. 1(1969) —, København (Copenhagen).
- G8: HISTORISCHE VIERTELJAHRSSCHRIFT. Zeitschrift für Geschichtswissenschaft und für Lateinische Philologie des Mittelalters. 1. Jg. (1898)-31. Jg. (1938), Leipzig.
- G9: REVUE DU MOYEN AGE LATIN. Études-textes-chronique bibliographie. Vol. 1(1945) —, Lyon/Strasbourg.
- G10: MEDIOEVO LATINO. Bollettino bibliografico della cultura europea da Boezio a Erasmo (secoli VI-XV). Vol. 1(1980) —, Spoleto.
- 【(*MEL): 中世史・中世研究関連の年次文献目録。】

[H] 文献学・中世ラテン語に関する研究文献 Lateinische Philologie des Mittelalters/Mittelaltein

ここに挙げる文献は、およそ完全からはほど遠い。[STOTZ]の第5巻が刊行されれば、最も包括的で信頼に足る文献リストを手にすることになるのだが、それまでは既刊の[STOTZ]第2・3・4巻の参考文献目録が最も新しく、そして情報量も多い。また[H7]巻末のビブリオ(S. 427-455)は、とくにラテン語作家別・地域別の研究文献情報が充実している。

[中世ラテン文献学]

- H1: L. TRAUBE, *Einleitung in die lateinische Philologie des Mittelalters*. Hrsg. von P. LEHMANN. München 1911.
- H2: P. LEHMANN, *Aufgaben und Anregungen der lateinischen Philologie des Mittelalters*. Vorgetragen am 6. Juli 1918 (Sitzungsberichte der Königlichen Bayerischen Akademie der Wissenschaften, philosophisch-philologische und historische Klasse, Jg. 1918, 8. Abhandlung). München 1918.
- H3: P. LEHMANN, Vom Leben des Lateinischen im Mittelalter, in: *Bayrische Blätter für das Gymnasialschulwesen* 65(1929), S. 65-82.
- H4: S. HELLMANN, Das Problem der mittelateinischen Philologie, in: *Historische Vierteljahrschrift. Zeitschrift für Geschichtswissenschaft und für Lateinische Philologie des Mittelalters*. Jg. XXIX (1935), S. 625-680.
- H5: W. BULST, *Über die mittlere Latinität des Abendlandes*. Heidelberg 1946.
- H6: W. VON DEN STEINEN, Das mittelalterliche Latein als historisches Phänomen, in: *Schweizerische Zeitschrift für Geschichte* Bd. 7(1957), S. 1-27.
- H7: *Mittellateinische Philologie. Beiträge zur Erforschung der mittelalterlichen Latinität* (Wege der Forschung Bd. 292). Hrsg. von Alf ÖNNERFORS. Darmstadt 1975.
- H8: *La lexicographie du latin médiéval et ses rapports avec les recherches actuelles sur la civilisation du moyen âge*. Colloques Internationaux du Centre National de La Recherche Scientifique, № 589. Paris, 18-21 octobre 1978, éd. par Yves LEFÈVRE. Paris 1981.
【[1978-PARIS-COL]: [DU CANGE:A1]出版300周年を記念して1978年パリで開催された国際会議のコロック。中世ラテン語辞典の各国別編纂状況や、デュ・カンジュに関する詳細な情報を含む。】

- H9: 兼岩正夫「中世ラテン文献学上の諸問題」(同著『ルネサンスとしての中世——ラテン中世の歴史と言語』筑摩書房1992年、206-215頁、初出1954年)。
【(兼岩 1954): 著者(1911-84)は、京都帝国大学卒(鈴木成高門下)、1958-75年東京教育大学教授。氏はわが国で唯一、歴史学の立場から中世ラテン文献学・中世ラテン語の問題に正面から取り組んだ人物。1954年という早い段階でE. R. CURTIUSに着目している点でも興味深い。】

[中世ラテン語]

- H10: F. BRUNHÖLZL, Lateinische Sprache und Literatur, in: *LexMA* Bd. V(1991), Sp. 1722- 1735.
- H11: J. SOFER, *Zur Problematik des Vulgärlateins*. Wien 1963.
- H12: H. SCHMECK, *Aufgaben und Methoden der modernen vulgärlateinischen Forschung*. Heidelberg 1955.
- H13: Christine MOHRMANN, *Étude sur le latin des chrétiens*. I-IV. Paris 1961-79.
- H14: F. KAULEN, *Sprachliches Handbuch zur biblischen Vulgata*. Eine systematische Darstellung ihres lateinischen Sprachcharakters. 2. Aufl., Freiburg im Breisgau 1904.
- H15: J. J. JEPSON, *The Latinity of the Vulgate Psalter*. Baltimore 1915.
- H16: W. E. PLATER/H. J. WHITE, *A Grammar of the Vulgate*. Being an Introduction to the Study of the Latinity of the Vulgate Bible. Oxford 1926.
- H17: A. CERESA-GASTALDO, *Il latino delle antiche versioni bibliche*. Roma 1975.
- H18: A. M. SCARRE, *An Introduction to Liturgical Latin*. 3rd. ed. New York 1938.
- H19: Ch. MOHRMANN, *Liturgical Latin. Its Origin and Character*. 2nd. ed. London 1959.
- H20: A. A. R. BASTIAENSEN, *Observations sur le vocabulaire liturgique dans l'Itinéraire d'Egérie*.

Nijmegen 1962.

- H21: A. VILLE, *Initiation à la grammaire du latin liturgique d'après les textes latins parlés ou chantés à la Messe*. Créteil 1969.
- H22: J. LECLERCQ, *Études sur le vocabulaire monastique du Moyen Age*. Roma 1961.
- H23: J. PIRSON, Le latin des formules mérovingiennes et carolingiennes, in: *Romanische Forschungen* Bd. 26 (1909), S. 837-944.
- H24: J. VIELLIARD, *Le latin des diplômes royaux et chartes privées de l'époque mérovingienne*. Paris 1927.
- H25: R. FALKOWSKI, Studien zur Sprache der Merowingerdiplome, in: *Archiv für Diplomatik* Bd. 17 (1971), S. 1-125.
- H26: R. L. POLITZER, *A Study of the Language of Eighth Century Lombardic Documents*. New York 1949.
- H27: E. LÖFSTEDT, *Studien über die Sprache der langobardischen Gesetze*. Beiträge zur frühmittelalterlichen Latinität. Stockholm et al. 1961.
- H28: K. J. HOLLYMAN, *Le développement du vocabulaire féodal en France pendant le haut Moyen Age*. Étude de sémantique. Genève et Paris 1957.
- H29: O. HAAG, Die Latinität Fredegars, in: *Romanische Forschungen* Bd. 10 (1899), S. 835-932.
- H30: P. TAYLOR, *The Latinity of the «Liber Historiae Francorum»*. New York 1925.
- H31: L. J. ENGELS, *Observations sur le vocabulaire de Paul Diacre*. Nijmegen 1961.
- H32: M. BONNET, *Le latin de Grégoire de Tours*. Paris 1890; Reprint, Hildesheim 1968.
- H33: J. PRISON, *La langue des inscriptions latines de la Gaul*. Bruxelles 1901.
- H34: A. CARNOZ, *Le latin d'Espagne d'après les inscriptions. Étude linguistique*. 2^e éd. Bruxelles 1906.
- H35: M. C. DÍAZ Y DÍAZ, El latín de la península ibérica. Rasgos lingüísticos, in: *Enciclopedia Lingüística Hispánica I*, Madrid 1959, pp. 153-197.
- H36: J. BASTARDAS PARERA, El latín medieval hispánico, in: *Enciclopedia Lingüística Hispánica I*, Madrid 1959, pp. 251-290.
- H37: B. LÖFSTEDT, Zur Lexikographie der mittellateinischen Urkunden Spaniens, in: *ALMA* t. XXIX (1959), S. 5-89.
- H38: B. LÖFSTEDT, Lexikographisches zu spanischen und portugiesischen Urkunden, in: *Eranos. Acta philologica Suecana* t. 58 (1960), S. 190-205.
- H39: W. D. LANGE, *Philologische Studien zur Latinität Westhispanischer Privaturkunden des 9.-12. Jahrhunderts*. Leiden 1966.
- H40: B. LÖFSTEDT, Zum dänischen Mittellatein, in: *Arctos, Acta philologica Fennica* t. 14 (1980), S. 39-50.
- H41: O. WEIJERS, *Terminologie des Universités au XIII^e siècle*. Roma 1987.
- H42: T. HUNT, *Teaching and Learning Latin in Thirteenth-Century England*. Vol. I: Texts, vol. II: Glosses, vol. III: Indexes. Cambridge 1991.
- H43: H.-H. KORTÜM, *Zur päpstlichen Urkundensprache im frühen Mittelalter*. Die päpstlichen Privilegien 896-1046 (Habilitationsschrift Tübingen 1992). Sigmaringen 1995.
- H44: F. LOT, A quelle époque a-t-on cessé parler latin?, in: *ALMA* t. VI (1931), pp. 96-159.
- H45: 兼岩正夫「中世におけるギリシア語とラテン語の問題」(同著『ルネサンスとしての中世——ラテン中世の歴史と言語』筑摩書房 1992年、192-205頁、初出 1950年)。
- H46: 兼岩正夫『西洋中世の歴史家——その理想主義と写実主義』(東海大学出版会 1975年)。
- H47: 佐藤彰一「識字文化・言語・コミュニケーション」(佐藤彰一・早川良弥編著『西欧中世史〔上〕—継承と創造—』ミネルヴァ書房 1995年、215-237頁)。

* 各種コンコーダンス(Concordantia)、中世に編まれた語彙集(Glossaria)については、[CAENEDEM 1997:F2] pp.380-383を参照のこと。またインターネットによる情報収集の可能性については、中世ラテン文献学に関する有益なサイトが管見のかぎりまだ見当らないため、現時点では中世史関係サイトの情報から出発するしかない。中世史関係サイトで定評があるものとしては、ドイツ・エアランゲン大学の Historische Ressourcen im Netz(Mittelalter) [http://www.phil.uni-erlangen.de/~p1ges/ma_fenster.html] (英訳あり)、英米語圏ではジョージタウン大学の The Labyrinth: Resources for Medieval Studies [<http://www.georgetown.edu/labyrinth/labyrinth-home.html>] がある。これらのサイトからリンクを伝つていけば、中世史に関するほとんどすべてのネット情報にアクセスできる。